II. 遺跡調査の概要

なごやじょうさんのまる 名古屋城三の丸遺跡

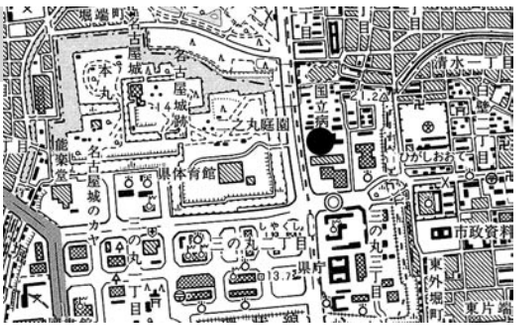
所 在 地　名古屋市中区三の丸４－１

調査理由　国立名古屋病院看護婦養成所大型化整備

調査期間　平成 14 年 4 月～ 9 月

調査面積　1,100 ㎡

担 当 者　石黒立人・鈴木正貴・鵜飼雅弘

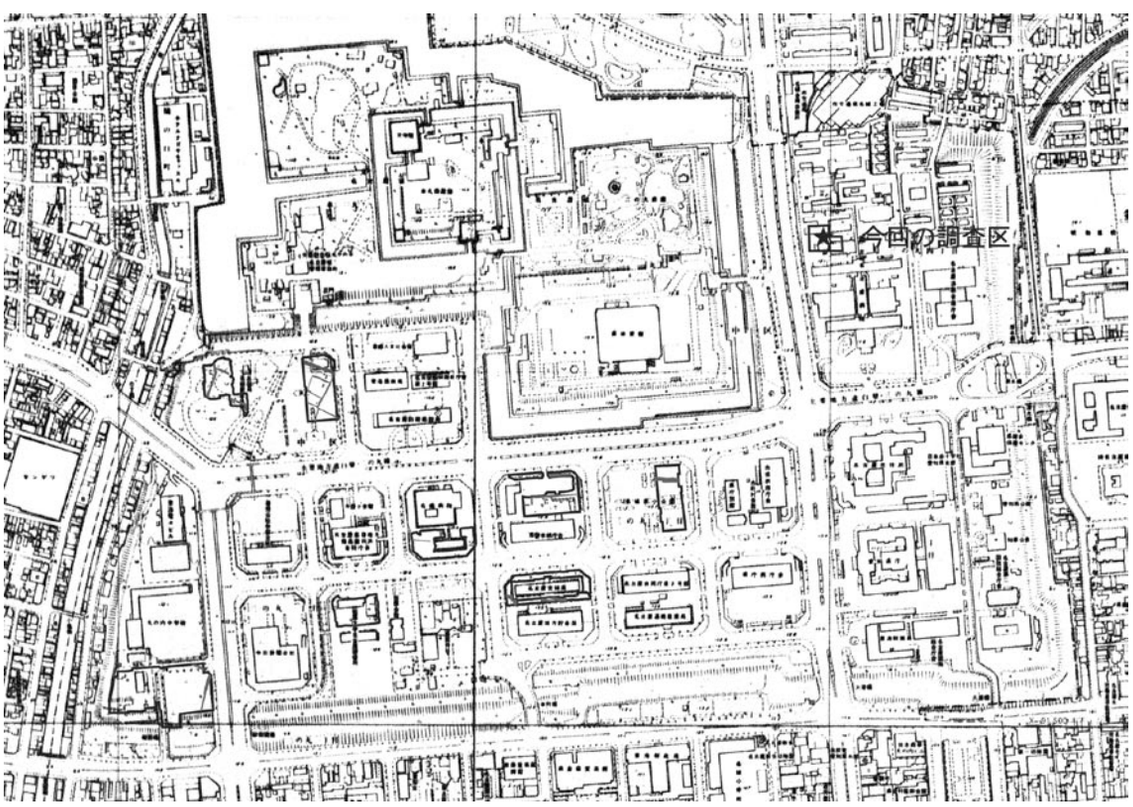


調査地点（1/2.5 万「名古屋北部」）

調査の経過　本遺跡は国立名古屋病院看護婦養成所大型化整備のための事前調査として、国立名古屋病院から愛知県教育委員会を通じて受けた委託事業として、平成 14 年 4 月から 9 月にかけて実施した。調査面積は 1100 ㎡である。

立地と環境　名古屋城三の丸遺跡は、名古屋台地の北西端に立地する名古屋城のうち、本丸・二の丸の南および東に配置された名古屋城三の丸一帯に広がる弥生時代、古代、中世から近世にかけての複合遺跡である。調査地点の現地表面の標高は約 13 ｍを測る。

今回の調査は二の丸の東側、現国立名古屋病院の敷地内で行った。この一帯は名古屋城築城当初武家屋敷が広がっていたが、1651（慶安４）年京都から広幡忠幸を迎える際ここを屋敷地として与え、その後３代藩主徳川綱誠が藩主就任まで過ごしたことから御屋形の称が始まり、以来幕末に至るまで藩主の一族・元藩主の側室が住んだ。廃藩置県後御屋形は取り壊され、跡地は陸軍第三師団東練兵場となったが、太平洋戦争末期名古屋陸軍病院東練兵場臨時分院が設置され、戦後国立名古屋病院に改組され現在に至る。（鵜飼雅弘）



調査の概要　今回の調査では、古墳時代から昭和時代前半に至るまでの様々な時期の遺構や遺物が確認された。検出された遺構は大きく、A 期:古墳時代後期～平安時代（6 世紀末～ 9 世紀)、B 期：鎌倉時代～室町時代（12 世紀～ 14 世紀)、C 期：戦国時代（15 世紀～ 16 世紀)、D 期：江戸時代初期（1610 年～ 1650 年頃)、E 期：江戸時代前期～江戸時代末期（1650 年頃～ 19 世紀中頃)、F 期：明治時代～昭和時代前半（1873 年～ 1945 年）の 6 時期に大別することができる。ここでは時代順に記述を進める。

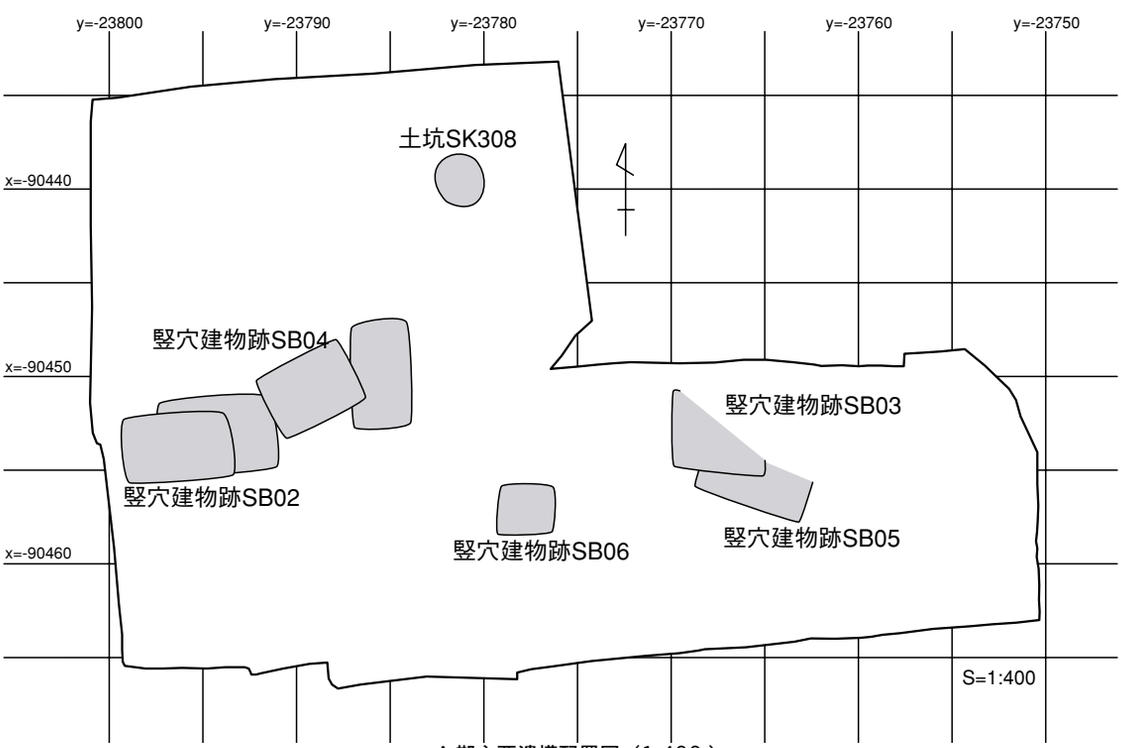
A　　期　古墳時代から古代の遺構としては、古墳時代後期の土坑 SK308 と奈良時代から平安時代初頭に位置付けられる竪穴建物跡群などが確認された。

SK308 は直径約 2m を擂鉢状の形で、中から 6 世紀末～ 7 世紀初頭の須恵器の杯身や杯蓋や甑などが出土した。この他に遺構には伴わないが、須恵器の円筒埴輪片が数点出土しており、付近に古墳が存在していたことが予想される。

一方、竪穴建物跡はその可能性があるものまで含めると 8 基が検出された。SB02 は平面形が約 6m ×約 4m の規模を持つ隅丸長方形であり、床面には貼床の痕跡が確認された。竪穴建物跡はいずれもカマドを確認することができなかった。これらの竪穴建物跡群は出土遺物から見て 8 世紀から 9 世紀にかけて存在したものと推測される。

B　　期　鎌倉時代から室町時代の遺構には区画溝と井戸などが存在する。SD27 はほぼ東西方向に走る比較的小規模な溝である。SD27 以外に確実にこの時期と考えられる溝が確認されていないため、区画の規模などを特定することができないが、井戸 SK310 の存在などからみて、SD27 は居住域（屋敷）を区画したものと想定される。SK310 は掘肩の平面形が大きい素掘りの井戸で、中から 13 世紀後半から 14 世紀前半に位置付けられる山茶碗などが出土した。

この時期に属する遺物の出土量はそれほど多くなく、調査区付近は比較的小規模な集落が展開したものと想定される。



A 期主要遺構配置図（1:400 ）

C　　期（戦国時代）

戦国時代の遺構としては、区画溝や井戸などが発見された。SD17 は幅が約 1m 、深さが約 1m の規模を持つほぼ東西方向に走る溝で、西端で南に屈曲している。この他に調査区中央部で SD35・SD36・SD39 などの小規模な溝が南北方向に平行して走っており、これらの溝で挟まれた細長い空間が道路であった可能性が考えられる。井戸は調査区の東側で SK147 や SK146 などが確認された。これらは素掘り井戸で中から 15 世紀後半から 16 世紀前半に位置付けられる瀬戸美濃窯産陶器や大量の土師器内耳鍋などが出土している。

発見された溝や道路は屋敷境を構成すると考えられ、SD17 の南北に 2 つの屋敷を想定することができる。これらの屋敷は出土遺物の時期からみて、戦国時代の那古野城に伴うものと考えられる。

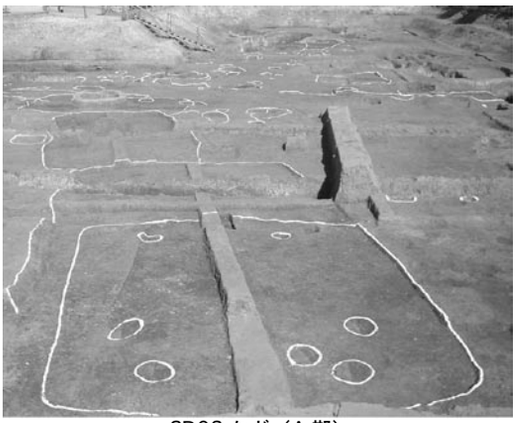
D　　期

17 世紀前半に所属する遺構としては、屋敷や屋敷の内部を区画する溝、掘立柱建物跡、井戸、土坑などの遺構が確認された。SD12・SD14・SD22 は幅が約 1m 、深さが約 1m を測る屋敷を囲む溝と想定され、SD12 と SD14 の間に挟まれた細長い空間が道路であったと考えられる。また、SD24 は中に柱穴が等間隔に並ぶ布堀状の溝で、塀などの基礎構造であったと思われる。この SD24 は SD12 などによる屋敷割りを変更して作られた可能性が想定され、門と推定される掘立柱建物跡が付随している。この他には、掘肩の平面形が比較的小さい素掘り井戸（SK144 や SK163 など）や、約 2.5m ×約 6m の隅丸長方形の平面形で深さが 2m 弱を測る大きな土坑 SK185 などが存在する。出土遺物には、瀬戸美濃窯産陶器の皿・笠原鉢・擂鉢や焼塩壺などがある。特筆すべきものとしては、区画溝 SD12 から調査区北側に屋敷を構えていたと推定される寺西藤左衛門の家紋鬼瓦が出土している。

出土遺物の時期や家紋瓦の存在などから、溝で区画された空間は御屋形が成立する以前の近世名古屋城の有力家臣たちが居住した武家屋敷であったと考えられよう。具体的な屋敷割の比定は今後の課題であるが、調査区は『金城温古録』に記載された石川光忠、粟生将監、一色竜雲等が屋敷を構えていた場所に相当すると想定される。



B 期・C 期主要遺構配置図（1:400 ）



SD02 など（A 期）



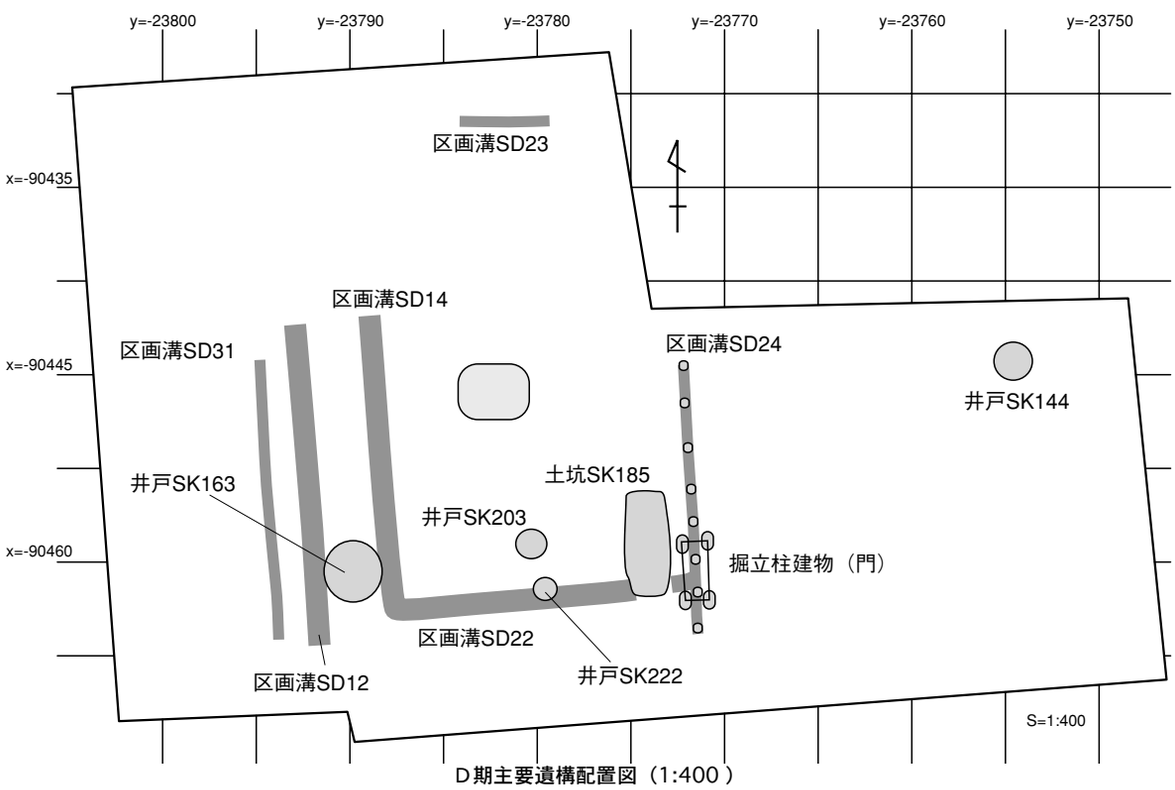
SD17 など（B～D期）



SD24・SK185（D 期）



SD31・SD12・SK163（D 期）



D期主要遺構配置図（1:400 ）

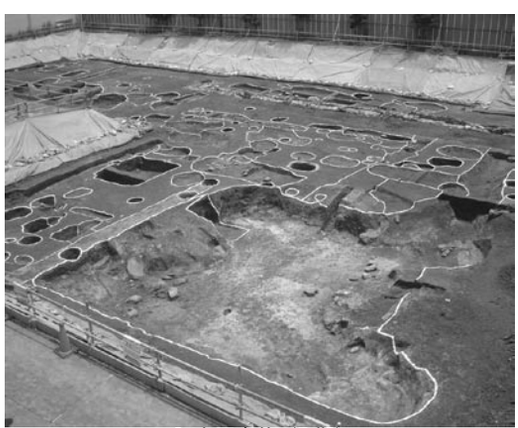
E　期（江戸時代前期～後期）

この時期では、まず調査区南西部を中心に広い範囲で厚さが 1m 弱を測る盛土が確認されており、D期（江戸時代初期）の遺構を埋め立てて造成され、大きく屋敷割りが変更されたことが判明している。この盛土（整地）層の上面から掘削されたと考えられる遺構として、庭園に伴う池、石組溝、地下室、石列、掘立柱建物跡、井戸、廃棄土坑など多種多様な遺構が存在する。

石組溝は合計で 4 条（SD01 ～ SD04）確認され、このうち SD01 は内法幅が約 65cm を測る立派なものである。SD03 の北側は石材が抜き取られており、裏込めの栗石のみが残された状態であった。これらの石組溝は建物に伴う排水路などの施設と考えられる。SD01 の南側には切石で構成された石列 SX09 や礎石の根石と考えられる集石が検出されており、これらは建物の基礎構造の一部であった可能性が想定される。地下室 SK94 は平面形が2.8m×2.7mのほぼ正方形となり深さは約1.8mを測るもので、17 世紀末から 18 世紀前半にかけての肥前窯産磁器碗や瀬戸美濃窯産陶器汁次などの遺物が出土している。調査区の東側には非常に大型の廃棄土坑群 SK01 があり、中からは大量の瓦や石材が出土した。この SK01 最下層からは鉋屑や端切れ材などの木材の廃材も多量に出土しており、これらの出土遺物からみて SK01 は建物の増改築などの際に出てきた廃棄物を埋めて処分した際に構築されたものと推測される。調査区東端部と北東端部では各々掘立柱建物跡の一部が確認されており、この他に屋敷内を区画する溝や小型の廃棄土坑などの遺構も認められた。

出土遺物としては、肥前・京都・瀬戸美濃窯産陶磁器などが認められるが、これまでの名古屋城三の丸遺跡の調査事例と比較すると陶磁器類の出土量がやや少ない点が特徴となっている。また、池などの遺構から出土した瓦の中には、御霊廟など特別な場所で出土する場合が多いとされる緑釉の陶器瓦が少なからず出土している。

石組溝や後述する庭園に伴う池、緑釉瓦の存在や出土遺物の時期などからみて、E 期の遺構や遺物は名古屋城を描いた各種絵図や記録にみえる「御屋形」に伴うものであると推測される。



調査区全体（E 期）



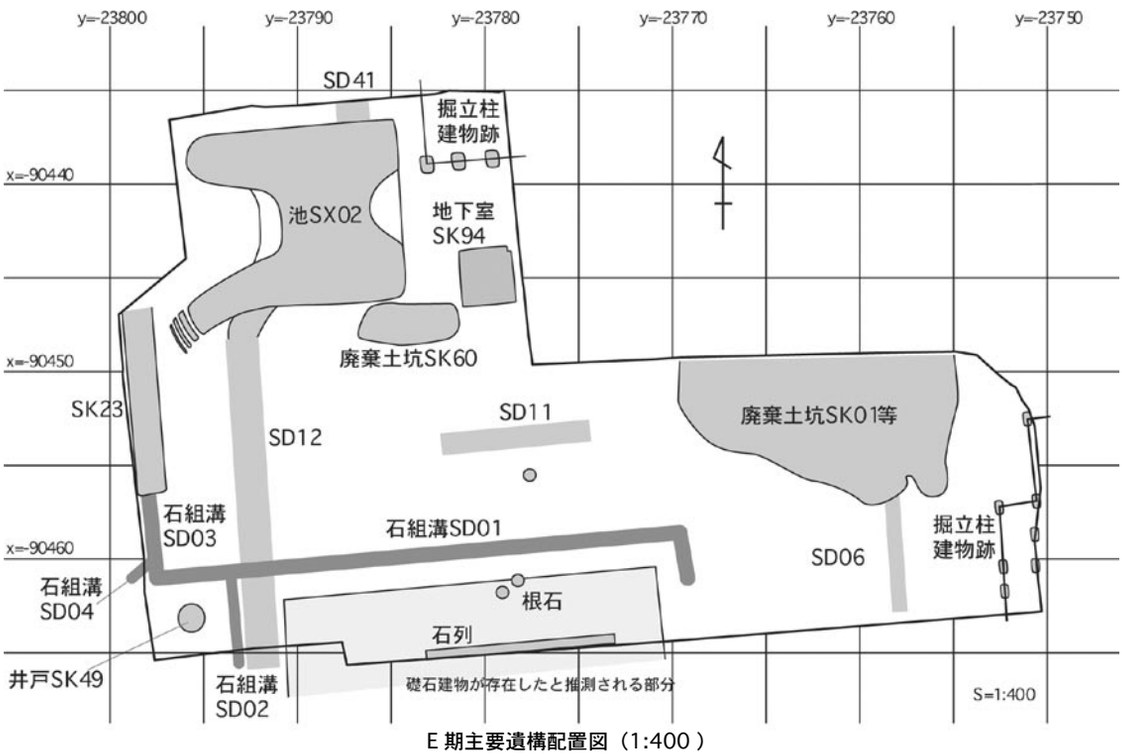
石組溝（E 期）

庭園に伴う池

E 期に属する遺構で最も注目される遺構は池 SX02 である。SX02 は約 10m 四方の大きさで深さは約 1.2m を測り、東西両側には内側に張り出し部（岬）を持つものである。池の周囲の壁は大きな穴が開いた部分や漆喰の壁が残った部分などがあり、本来は巨石を池の周りに配置しその隙間を漆喰壁で覆い尽くしたものと考えられる。北壁が直線的に作られていることや石の配置などから考えると、池は北側から観賞するように造られていると思われる。おそらく、池の北側に書院などの建物が存在し、そこから庭園の風景を楽しんだものと想像される。

池 SX02 の具体的な構造は次のとおりである。水の取り入れ口は南西部分の漆喰で造られたスロープが該当するが、排水口は北東部にある幅広いやや浅い溝 SD41 が存在する他は確認できなかった。池の西側の張り出し部（岬）の先端には巨石が何個かはめ込まれていたと復元され、この部分が磯浜を表現していると考えられる。一方、反対側の東側の張り出し部（岬）の上部には白い小玉石が敷かれており、この部分が洲浜を表現していると思われる。東側の張り出し部の北側には階段状遺構が設置されていた。池の底は、古い段階では溝状の凹地が設けられ、新しい段階では黄色粘土を貼り付けた上に玉石が敷かれていた。このような状態からみて池全体の構成は、南西部の上流から磯浜や洲浜を経て北東部に水が流れていくという形に復元されよう。

今回確認された石による装飾が施された池は庭園に伴うものと考えられ、名古屋城二の丸庭園などで類例が認められる。しかし、名古屋城三の丸にある他の家臣の武家屋敷ではこれまでの発掘調査で庭園遺構は見つかっておらず、今回初めてこうした庭園遺構が発見されたことは、御屋形が特別な存在であったことを示す貴重な事例となるだろう。そして、名古屋城二の丸庭園は大規模な回遊式庭園であるが、今回確認された「御屋形庭園」は池の規模などから見て、書院などから眺める池泉庭園と位置付けられよう。



E 期主要遺構配置図（1:400 ）



SX02 水の取り入れ口



SX02 南壁（正面）



SX02 東張り出し部（洲浜）



SX02 西張り出し部（磯浜）



池 SX02 全体

F　　期　1873 年に陸軍第三師団が名古屋に駐屯した際に、今回の調査地点は東練兵場になっていた。調査の結果、現地表下約 1.2m 前後で東練兵場の地面と考えられる硬化面とその上に造られた礎石建物跡 SB01 が発見された。SB01 は 7.1m（8 間）× 25.3m 以上（28 間以上）の規模を持つと復元され、礎石の状態が脆弱であることなどからみて大平洋戦争の終戦直前に建てられた名古屋陸軍病院第二分院の病棟と推定される。また、この時期の遺物として「名古屋陸軍病院」と記された瀬戸窯産磁器湯呑などが出土している。

ま と め　今回の調査の結果、これまで調査事例がほとんどなかった名古屋城三の丸遺跡の北東部の様相が明らかとなり、多様な時期にわたる多くの成果が得られた。最後に箇条書きでその成果をまとめておく。

1、古墳時代から古代そして中世にかけて、名古屋台地北端の縁辺部に遺跡が展開することが明確となった。

2、戦国時代の那古野城の中心は現在の二の丸にあったと言われているが、今回初めて二の丸の東側地域にも那古野城に関連する屋敷が広がっていたことが想定された。検出された溝は松田訓が設定した正方位溝群（松田 2002）に属するものと考えられ、時期的には古瀬戸後期末段階まで遡る可能性が高い。那古野城の変遷を考察する上で貴重な情報が得られたといえる。

3、江戸時代初期の武家屋敷が確認され、これらは 17 世紀中頃に廃絶されその後大規模な整地を伴って御屋形が造成されたことが判明した。また、17 世紀前半の中でも屋敷割の変更があったことが考えられ、近世名古屋城三の丸の武家屋敷の成立過程を考えるためのデータが追加された。

4、御屋形の時代では、庭園に伴う池や石組溝などこれまでの名古屋城三の丸の武家屋敷とは異なる遺構群が発見された。遺物においても緑釉陶器瓦の存在など御屋形の特異性を表現する状況を読み取ることができたが、今後は御屋形と三の丸の武家屋敷との間で遺構や遺物の様相が具体的にどう相違しているのかをより詳細に検討していく必要があるだろう。　（鈴木正貴）

文　　献
松田訓 2002「遺構からみた那古野城の残影」『研究紀要第３号』愛知県埋蔵文化財センター


SB01（F 期）


SK94 出土遺物（E 期）

伝法寺野田遺跡（でんぽうじのだ）

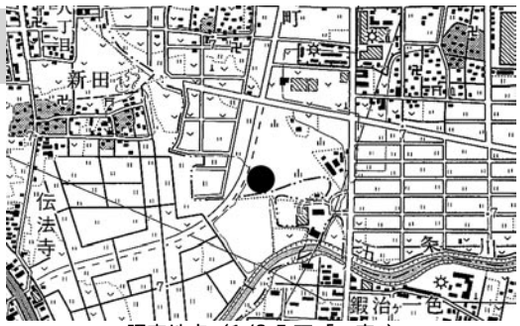
所 在 地　一宮市丹陽町伝法寺地内

調査理由　五条川右岸流域下水道整備

調査期間　平成 14 年 4 月～ 7 月

調査面積　1,540 ㎡

担 当 者　石黒立人・川添和暁



調査地点（1/2.5 万「一宮」）

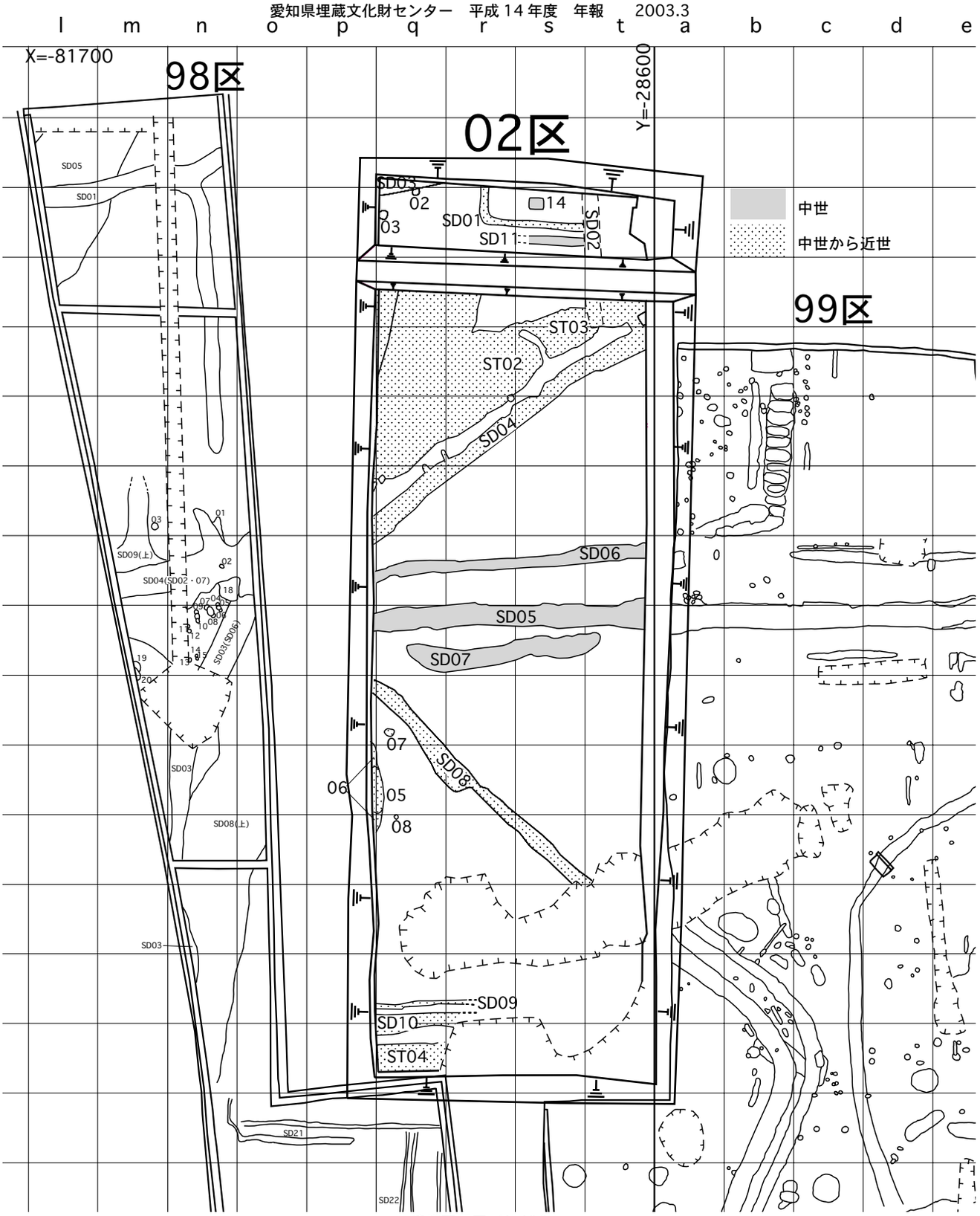
調査の経過　本遺跡は、西から南へと流れが大きく蛇行する、五条川右岸の自然堤防上に立地する。一宮市と岩倉市との境にある本遺跡周辺には、近接する権現山遺跡をはじめ、元屋敷遺跡・北島白山遺跡・大地遺跡などが所在し、縄文時代後期以降の各時代の遺跡が展開する地点として注目されている。

調査は、五条川右岸流域下水道整備に伴う事前調査として、愛知県建設部より愛知県教育委員会を通じた委託事業として行った。過去 98・99 年度にも調査が行われており、弥生時代から古墳時代、古代・中世にわたる複合遺跡であることが明らかになっている。98 年度には、弥生時代中期中葉と考えられる水田跡が検出され、大畦畔の脇から無茎銅鏃が出土している。99 年度には、同時期とされる溝や竪穴状遺構の検出が報告されている。今年度は 98・99 両年度調査区に挟まれた部分が、調査対象区となった。


調査区全景（北より）

調査の概要　検出された遺構には、中世以降の溝数条、中世の方形土坑、近世の畦畔・溝などがあり、方形土坑を除いては、水田耕作に関わる遺構と考えられる。溝および畦畔の軸線が真北に対して 45 度に振るものと直交するものの二者が見られ、時期の違いが想定される。

調査区南端では、灰黄色シルト層・黒褐色粘土層 (98 度調査の VII 層か) の堆積が見られた。灰黄色シルト層はマンガン斑が多く見られたことから水田耕作に伴う堆積土であった可能性が考えられるものの、水田跡の検出までには至らなかった。この層からは、弥生時代後期～古墳時代初頭の遺物が出土している。黒褐色粘土層は出土遺物は微少であり、形成時期などは不明である。旧地形は北に向かって高くなっているものの、近世の畦畔脇や畑と考えられる高まりなどには黒褐色粘土層の部分的な残存が見られた。元来調査区全体に黒褐色粘土層が堆積していていたものが、後世の耕作により削平されたものと考えられる。



遺構配置図（1:400 ）

ま と め　調査の結果から、当地は弥生時代以降、耕作が継続して行われていた場所であると考えられる。灰黄色シルト層での水田跡の未検出は悔やまれるところだが、今回の調査において弥生時代中期中葉に比定できる遺物が見られないことは、過去の調査成果を考える上で参考となるであろう。　（川添和暁）

かみしなのかにかわ
上品野蟹川遺跡

所 在 地　瀬戸市上品野町地内

調査理由　国道 363 号道路建設

調査期間　平成 14 年 8 月、平成 15 年 1 月～ 3 月

調査面積　1,809 ㎡

担 当 者　藤岡幹根・酒井俊彦



調査地点（1/2.5 万「多治見」）

調査の経過　調査は , 国道 363 号道路建設に伴う事前調査として、愛知県建設部より愛知県教育委員会を通じた委託事業として実施した。これまでに（財）瀬戸市埋蔵文化財センターが平成 7 年度と同 11 年年度に調査を行い、本センターは、平成 11 ～ 13 年度に遺跡範囲の西部において計 8550 ㎡の調査を実施した。今年度は、遺跡範囲西部において昨年度の調査区の南側に A 区、遺跡範囲東端より B・C 区を設定して調査を行った。昨年度までの調査によって主な遺構として平安時代の竪穴住居址 1 棟と同時期の土坑および自然河道などが検出され、遺物としては旧石器時代から戦国時代の遺物が出土した。

立地と環境　遺跡は瀬戸市北東部の山地間にある谷地形の低地部に立地し、谷地形内に流れる蟹川の両岸に遺跡範囲が広がる。標高は、約 180m を測る。調査範囲の大部分は近年まで水田であり、今年度調査区の一部は農業用の溜池であった。遺跡東側の山地上には中世城館の桑下城跡が、南方 0.5km には本センターが調査した旧石器時代から近世かけての複合遺跡である上品野遺跡が所在する。

調査は、昨年度の調査区 01A 区と 01B 区の南に接する部分に A 区 (200 ㎡) 、遺跡範囲東端より西へ連続して B 区と C 区 (計 1609 ㎡) を設定して実施した。

調査の概要　A 区は、蟹川右岸の谷地形の中央部に位置する。基本層序は現水田耕作土下の黒色土の包含層を挟んで、基盤である河川性の堆積物の砂礫層となる。耕作土下部の包含層中より少量の中世の灰釉系陶器 (山茶椀) が検出された。

B・C 区は、蟹川左岸の山地斜面から谷地形の低地部分に位置する。基盤は山地斜は粘土層を基本とする洪積層であり、低地部分は扇状地の砂礫層である。低地部分は近世以降の耕作土下に戦国時代までの湿地性の堆積土層が存在し、一部土石流による礫層および河川性の砂層を挟んで扇状地の砂礫層に達する。遺物としては山地斜面上の包含層中より、中世の灰釉系陶器 (山茶椀) 、中世末の瀬戸窯産施釉陶器類と常滑窯産陶器が少量検出された。湿地性の堆積層からは 8 世紀代の須恵器杯身・蓋、13 世紀代の灰釉系陶器 (山茶椀) 、中世末の瀬戸窯産施釉陶器類及び土師器鍋が少量出土した。B 区の山地斜面に接する部分の湿地性の堆積層からは伐採された自然木、板材、小形の曲物などが出土し、若干の杭が打ち込まれた状態で検出された。また、これらに混じって拳大よりやや大きめの礫が集中して出土した。遺物は摩耗しておらず、調査区に接する山地の尾根上にこの時期の集落が存在することが考えられる。また、加工された木材が出土していることからこれに関連する作業場の存在も想定することができる。今後は B・C 区の出土遺物と隣接する山地頂上の桑下城跡との関連が検討課題になるものと考えられる。（酒井俊彦）



02B 区全景（東より）



02B 区自然木切断面



02B 区遺物出土状況



02B 区出土墨書土器



02B 区遺物出土状況

長谷口（はせぐち）遺跡

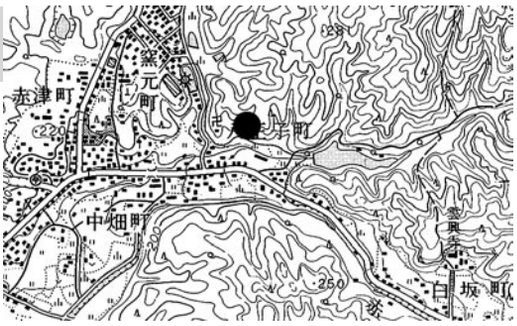
所 在 地　瀬戸市長谷口町地内

調査理由　東海環状自動車道建設

調査期間　平成 14 年 7 月～ 9 月

調査面積　1,325 ㎡

担 当 者　藤岡幹根・宇佐見守・永井宏幸



調査地点（1/2.5 万「猿投山」）

調査の経過　調査は東海環状自動車道建設の事前調査として、国土交通省愛知国道工事事務所より愛知県教育委員会を通じた委託事業として平成 12 年度に東地区（00 A・B区）を 1,200 ㎡実施し、今年度は西地区を 1,325 ㎡実施した。

立地と環境　長谷口遺跡は瀬戸市の東南部、矢田川の支流である赤津川流域に広がる赤津盆地を囲む東側の丘陵、赤津川に流れ込む木下川右岸の段丘上、標高 195 ～ 200 mに立地する。隣接する遺跡としては、今回の調査で確認された江戸末期から明治初期の屋敷地と関連性が指摘できる長谷口Ｂ窯跡が丘陵斜面にある。また、木下川を挟んで左岸には縄文時代早期後半と中世を中心とする八王子遺跡がある。

調査の概要　現況は４つの平坦地が段状を成し、00 A区（木下川沿いの低位面）が概ね下段から中段、00 Ｂ区（丘陵側の高位面）が上段に相当し、さらに一段高い平坦地が今年度認められた。したがって、調査直前までの耕作によって土地の改変が想定され、遺構は削平されていると思われた。

上面の遺構　ところが、表土を除去した後、これら４つの段状地形は江戸末期から明治初期の屋敷地に関わることが判明した。特に最上段面、すなわち山側に位置する平坦面には、柱穴列や土坑など屋敷に関わる遺構群が展開し、上段面との境に溝が１条確認できた。調査区北西に隣接する長谷口Ｂ窯に関連する窯道具（匣鉢など）が出土した遺物に含まれることから、窯操業時に関わる施設であった可能性が高い。

上段面では中世後期を中心とする遺構群と平安時代の造り付けカマドをもつ竪穴住居２棟が検出された。平安時代の SB01 はプランの北西寄りと南東寄りの２ヶ所に集中して遺物が確認できた。

中～下段面は中世の遺構・遺物が散見するものの希薄で、00 A区の延長上に位置する木下川の河道の一部と考えられる礫群が認められる程度であった。

下面の遺構　今回の調査で注目される成果として、これら中世以降の遺構群より下位に、縄文時代早期後半と中期末、弥生時代中期後葉から後期前半の遺構群があげられる。

弥生時代の遺構としては、竪穴住居２棟と板状鉄斧の出土した土坑１基がある。これらはすべて重複する遺構群で、SB07（中期後葉）→ SK120 → SB03（後期前半）の順の切り合い関係が確認できた。問題は、SK120 に鉄斧以外に遺物が出土しなかった点である。鉄斧の形状などから弥生時代後期頃に比定できるが、希少な遺物だけにその年代観は今後の課題である。

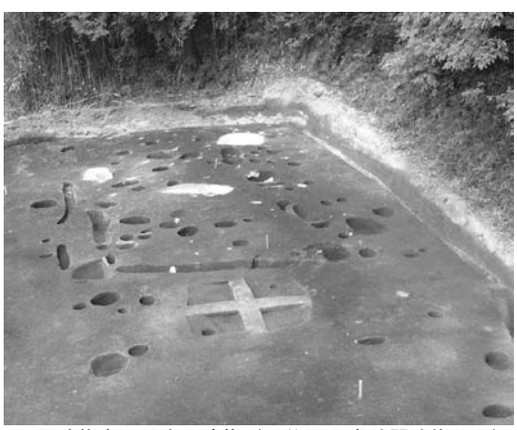
縄文時代中期末の遺構は竪穴住居２棟と土坑数基がある。このうち SB06 は住居にめぐる壁溝の形状から五角形のプランが想定できる。中央に円形の炉を有し、５本の主柱穴が配置さ

れている。また、住居が位置する上段面より一段上に相当する最上段に単独の埋甕 SK146 がある。正位に埋められ、底部を穿っている。

縄文時代早期後半の遺構は山に近い最上段面を中心に確認できた。遺構は最上段面の北西寄りが中世以降の削平で滅失している部分を除けば、ほとんど満遍なく認められた。ただし、住居に関連する柱穴などを特定するにはいたらず、人為的な掘削ではない窪地も含むと考えられるため、今後の検討を要する。00 B区で検出した集石炉 SX01 と同様の遺構 SK169 は 00 B区と同じ上段面に位置し、遺構が密集する最上段面からやや離れている。

ま と め　調査の成果としては、まず、縄文時代早期後半と中期末の遺構・遺物を確認したこと。そしてこれらが隣接する八王子遺跡の希薄となる時期を補うことから、２つの遺跡を通して早期後半から中期にいたる時期が通観できる好資料を得ることができた。さらに弥生時代の鉄斧は県下では希少な資料を得ることができた。最後に、長谷口Ｂ窯跡に関連する施設が確認できたことから、窯操業に関わるモデルの一例を得ることができた。

（永井宏幸）



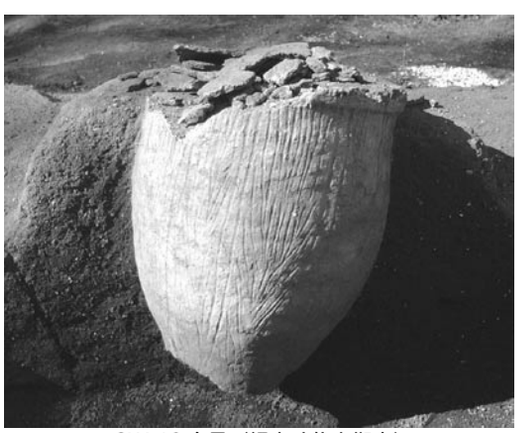
江戸時代末～明治の建物（長谷口 B 窯跡関連施設？）



SB06 全景（縄文時代中期末）

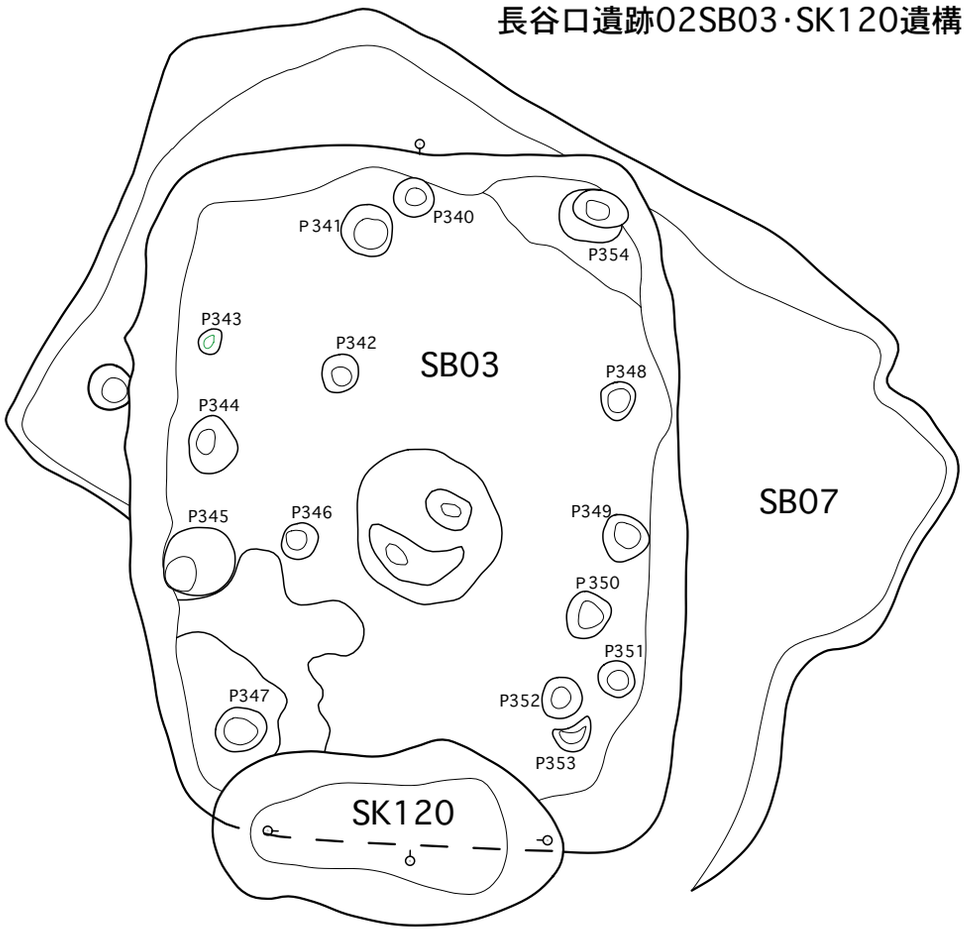


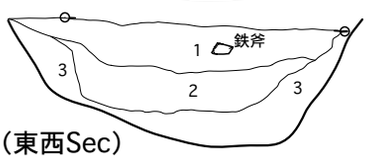
下面全景（縄文時代早期後半）



SK146 全景（縄文時代中期末）

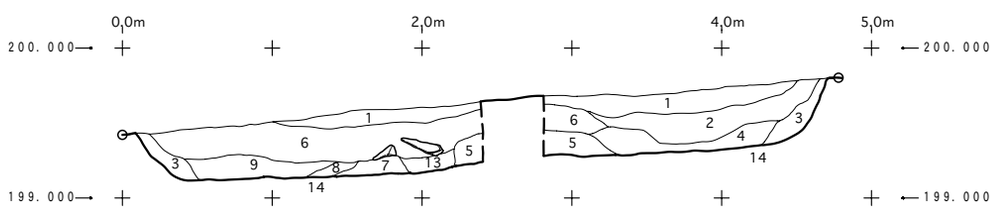
長谷口遺跡02SB03･SK120遺構図　S＝1





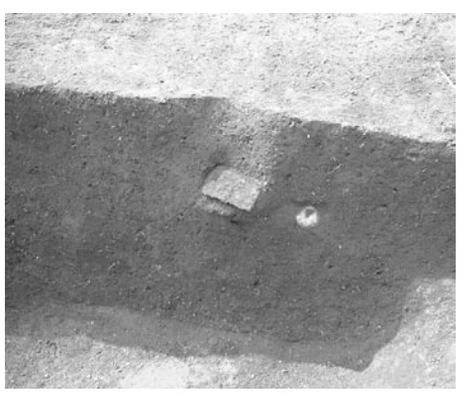
SK120　断面図（東西Sec）

層位番号	土色記号	土色	備考
1	5YR4/2	灰褐色土	2～4mm大の砂礫混じる
2	2.5YR3/1	暗赤灰色土	〃
3	10YR7/6	明黄褐色砂質土	〃



SB03　断面図（南北Sec）

層位番号	土色記号	土色	備考
1	5YR3/2	暗赤褐色土	5YR4/2灰褐色土、2～4mm大の砂礫混じる
2	〃	〃	5YR 4/3にぶい赤褐ブロック、　〃
3	7.5YR2/3	極赤褐色砂質土	2～4mm大の砂礫混じる
4	7.5YR2/2	黒褐色土	5YR4/3にぶい赤褐ブロック、2～4mm大の砂礫混じる
5	2.5YR2/1	赤黒色土	〃
6	5YR3/2	暗赤褐色土	7.5YR4/3褐色ブロック、2～4mm大の砂礫混じる
7	10YR5/2	灰黄褐色砂質土	10YR7/6明黄褐色砂質土　〃
8	5と同じ		
9	4と同じ		
10	〃		
11	5YR2/2	黒褐色土	2～4mm大の砂礫混じる
12	3と同じ		
13	4と同じ		
14	10YR7/6	明黄褐色砂質土	2～4mm大の砂礫混じる



鉄斧出土状態

八王子（はちおうじ）遺跡

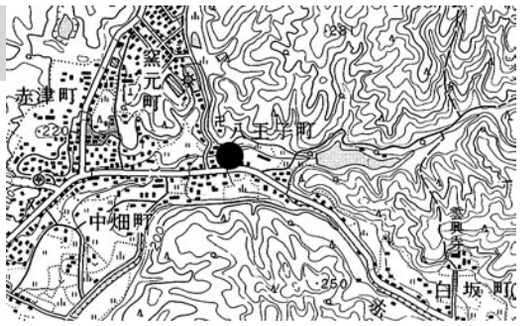
所 在 地　瀬戸市八王子町地内

調査理由　東海環状自動車道建設

調査期間　平成 14 年８月～９月

調査面積　100 ㎡

担 当 者　藤岡幹根・宇佐見守・永井宏幸



調査地点（1/2.5 万「猿投山」）

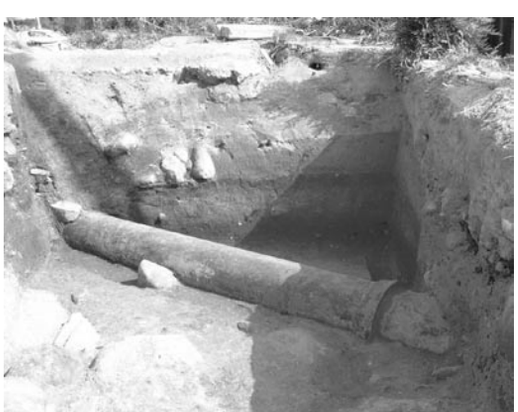
調査の経過　調査は、東海環状自動車道建設にともなう事前調査として、国土交通省愛知国道工事事務所から愛知県教育委員会を通じた委託事業として実施した。遺跡の調査は平成 10 年度から継続して行われており、本年度は 00 A区の西接する 100 ㎡である。

調査の概要　遺跡は赤津川と木下川によって形成された河岸段丘上の標高 197m 前後に立地する。木下川を挟んで北側には縄文時代から近代にいたる長谷口遺跡が隣接する。

今回の調査は、八王子遺跡の最終年度にあたる。調査区のほとんどが後世の削平により滅失していた。ただし、北東寄りの一部に縄文時代から中世の包含層を確認することができ、中世陶器・縄文土器などが出土した。遺構は検出されず、包含層が確認された調査区北側にある木下川に向かって、地形の傾斜が確認できた。なお、調査区南側は木下川の氾濫原と思われる砂礫層の堆積が下位に確認された。したがって、縄文時代以前には今回の調査区近くまで河道が広がっていた可能性が指摘できる。　（永井宏幸）


調査区全景


土層断面


導水管


作業風景

惣作・鐘場遺跡（そうさく・かねば）

所 在 地　瀬戸市惣作町・鐘場町地内

調査理由　県道瀬戸設楽線・東海環状自動車道建設

調査期間　平成 14 年 4 月～ 12 月

調査面積　5,465 ㎡

担 当 者　藤岡幹根・酒井俊彦・成瀬友弘



調査地点（1/2.5 万「猿投山」）

調査の経過　調査は県道瀬戸設楽線建設および東海環状自動車道建設のため愛知県建設部道路建設課および国土交通省愛知国道工事事務所から愛知県教育委員会を通じて委託を受け、平成 12 年度より実施している。平成 12 年度は遺跡範囲の南部、平成 13 年度は南部および北辺部分の調査を行った。これまでの調査によって後期旧石器時代末から近世までの遺構・遺物が検出された。今年度は、遺跡北部と南部の調査を実施した。

立地と環境　惣作・鐘場遺跡は、瀬戸市東部、惣作町・鐘場町に所在し、矢田川支流である赤津川左岸の標高 170m 前後の２段よりなる洪積段丘上に立地する。遺跡は赤津川と門前川を西限及び南限とし、北側と東側は山地を北限及び東限とする。遺跡範囲の北部は大目神社の所在する山塊からのびる尾根状の段丘上に位置し、惣作川によって南部と隔てられるため遺跡は地形的に２つに別れる。周辺には南側に太子縄文遺跡、太子遺跡、北東部の山地部に大目神社古墳、巡間 E 窯跡、瓶子窯跡、凧山 C 窯跡、凧山窯跡、凧山屋敷遺跡、凧山 A 窯跡、赤津川上流に長谷口遺跡、八王子遺跡がある。

調査の概要　本年度の調査区は、遺跡北部の昨年度 01D 区に続く南側部分に 02A 、02B 区を、南部では昨年度 01A 区北側に 02C 区、東側に 02D 区を設定した。

02A 区　昨年度 01D 区の南側に接する調査区である。式内社である大目神社からのびる尾根状の洪積台地の赤津川に面する低位段丘上に相当する。調査区北端は、大正時代以前の赤津川の旧流路である。基本層序は、現耕作土下に黒色土層を挟んで段丘の洪積層に至る。黒色土層の上面及び洪積土層上面において遺構が検出された。

主な遺構としては、古墳時代初頭の竪穴住居址２棟、古墳時代後期の竪穴住居址８棟、中世の不明遺構がある。古墳時代初頭の竪穴住居址は調査区中央やや南よりで検出され、埋土は黒色土を基本とする。竪穴住居は平面隅丸方形で、遺構に伴う構造物は不明である。出土遺物は土師器が少量検出された。古墳時代後期の竪穴住居址は調査区全体で検出され、平面隅丸方形である。粗粒砂と細礫混じりの暗灰色土を基本とし、確認できるものでは竈が北北西から北北東の辺に認められる。SB04 は検出面から床面までの掘り込みが比較的深く、やや大形の竪穴住居である。径 30cm 程の柱穴を 4 隅に検出され、柱の径は 15cm 前後である。遺構内からの出土遺物は少なく、住居の切り合いは SB07・SB08 の１ヶ所で単一時期に近い集落と考えられる。中世の遺構は旧赤津川河道に面する段丘縁辺部に認められる。旧河道に並行して不定形の落ち込み状の遺構が確認された。部分的に溝状になるが、性格は不明である。13 世紀代の灰釉系陶器 (山茶椀) が、比較的まとまって検出された。

02B 区　02A 区に連続する南側の調査区である。北部は 02A 区と同じく低位段丘面に相当するが、中央部は上位面にあたる。南部は近世以降の耕作地造成のために南の惣作川に向かって階段状に下がり、南から３段目が低位段丘面にあたる。

主な遺構としては、弥生時代から中世の遺構を検出した。弥生時代後期から古墳時代初頭の時期の遺構としては竪穴住居址６棟、溝１条 (SD08) 等を検出した。竪穴住居跡は全て上位段丘面上で確認され、SB02 は段丘の縁の削平により大部分欠失する。平面形は隅丸方形でやや大形のもの (SD03・07・11) と小形のものがある。柱穴は確認できたが、SB11 以外は炉址等の構造物は検出されなかった。SB03・05・06 からは比較的まとまって土器が出土した。SB03 からは床面より浮いた状態で弥生時代後期土器・土製品が検出され、銅鐸型土製品１点が出土した。SD08 は、上位段丘の直下をめぐる下位段丘面上の溝で、弥生時代後期に掘削され、古墳時代初頭に埋没している。赤津川方向にのびる上位段丘の先端部分の集落を囲繞しているものと推定される。溝は、検出面より深さ約 1.2m 、幅約 3.7m を測り、断面 V 字形である。溝両側面は水流による大きな凹凸があり、底部も水流により両側が削られ拡張している。底部の拡張部分の埋土は拳大以上の大きさの礫を交える粗粒砂で、上部は黒色土となる。土石流などの強い水流が流れて埋没した後掘り返しが行われている。溝下層から少量の弥生時代後期の土器が検出され、検出面に近い高さで古墳時代初頭の土器が投棄された状態で多量に出土した。古墳時代後期の遺構として調査区北端に SB01 が検出された。02A 区の集落に属するもので、床面直上より拳大以上の自然礫が多量に検出されたが、遺物は少量である。奈良時代の遺構としては、竪穴住居２棟が検出された。SB10 はほぼ南北方向に主軸をもち、東辺に竈を有し、床面及び竈から須恵器、土師器甕などが少量検出された。中世の遺構としては 15 世紀代の溝、土坑などが調査区北部の低位段丘面上で検出された。SD02・03 は上位段丘面直下に平行してはしり、15 世紀代の施釉陶器類が比較的まとまって出土した。いずれも検出面からの掘り込みは浅いが、SD02 は一部土坑状の掘り込みとなっている。溝の性格は不明である。調査区北端部で掘立柱建物が検出され、同部分の土坑より鉄滓や鞴の羽口などが出土している。また、調査区南部の低位段丘面上で 13 世紀代の土坑が検出された。その他、SD07 から中世から近世までの陶器類が投棄された状況で検出されたが、調査区南半の階段状の削平は近世以降の時期と推定される。

02C 区　遺跡南部の 00A 区と 01A 区に間の調査区で、上位段丘面及び下位段丘面への傾斜地に位置する。基本層序として現耕作土下部が段丘の洪積層となる。

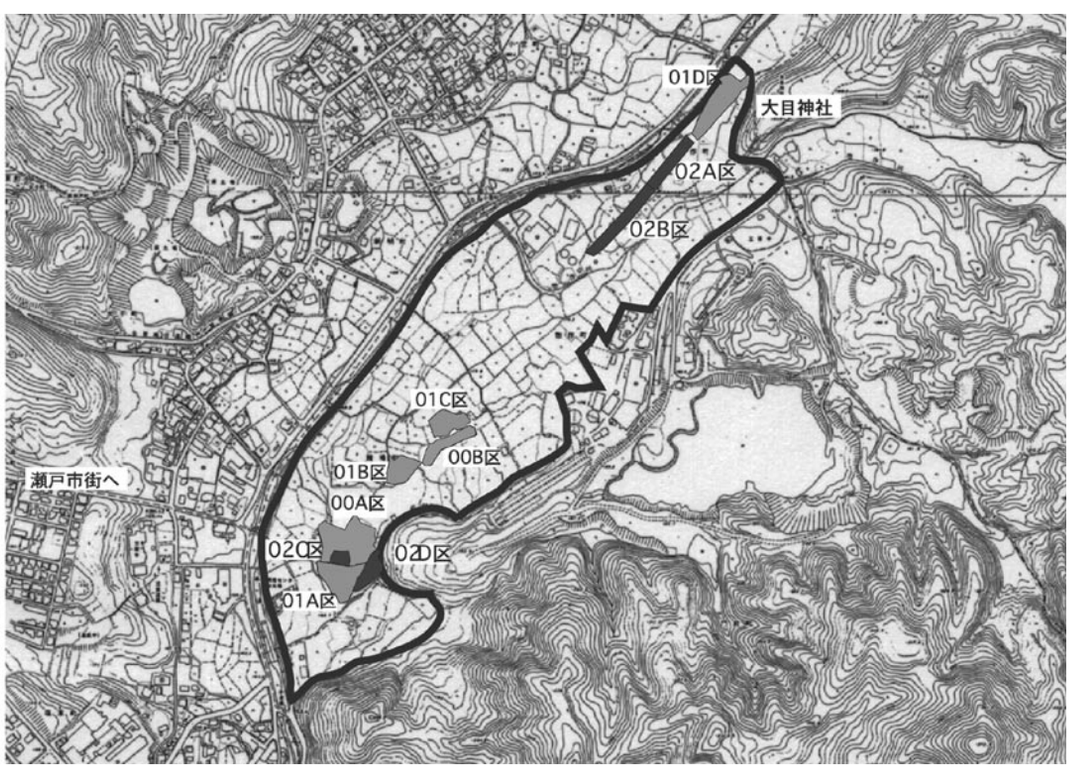
遺構は中世末の溝１条 (SD01) を検出する。SD01 は段丘端に平行しながら西方向に斜面をやや下る溝で、14 世紀代後半から 15 世紀前半の瀬戸窯産施釉陶器が少量検出された。また、段丘面は端部に向かってやや落ち込み、落ち込みの埋土よりこれと同時期の遺物が検出され、その他、傾斜地の包含層中からも同時期の瀬戸窯産陶器類などが出土した。

02D 区　遺跡南端に位置する調査区である。赤津川と門前川の間の段丘の門前川側に面する下位段丘面に位置する。調査区の南端は門前川の河谷である。基本層序は現耕作土下部が段丘の洪積層で、門前川河谷の端に近い部分に中世の包含層の黒褐色土層が洪積層上に存在する。

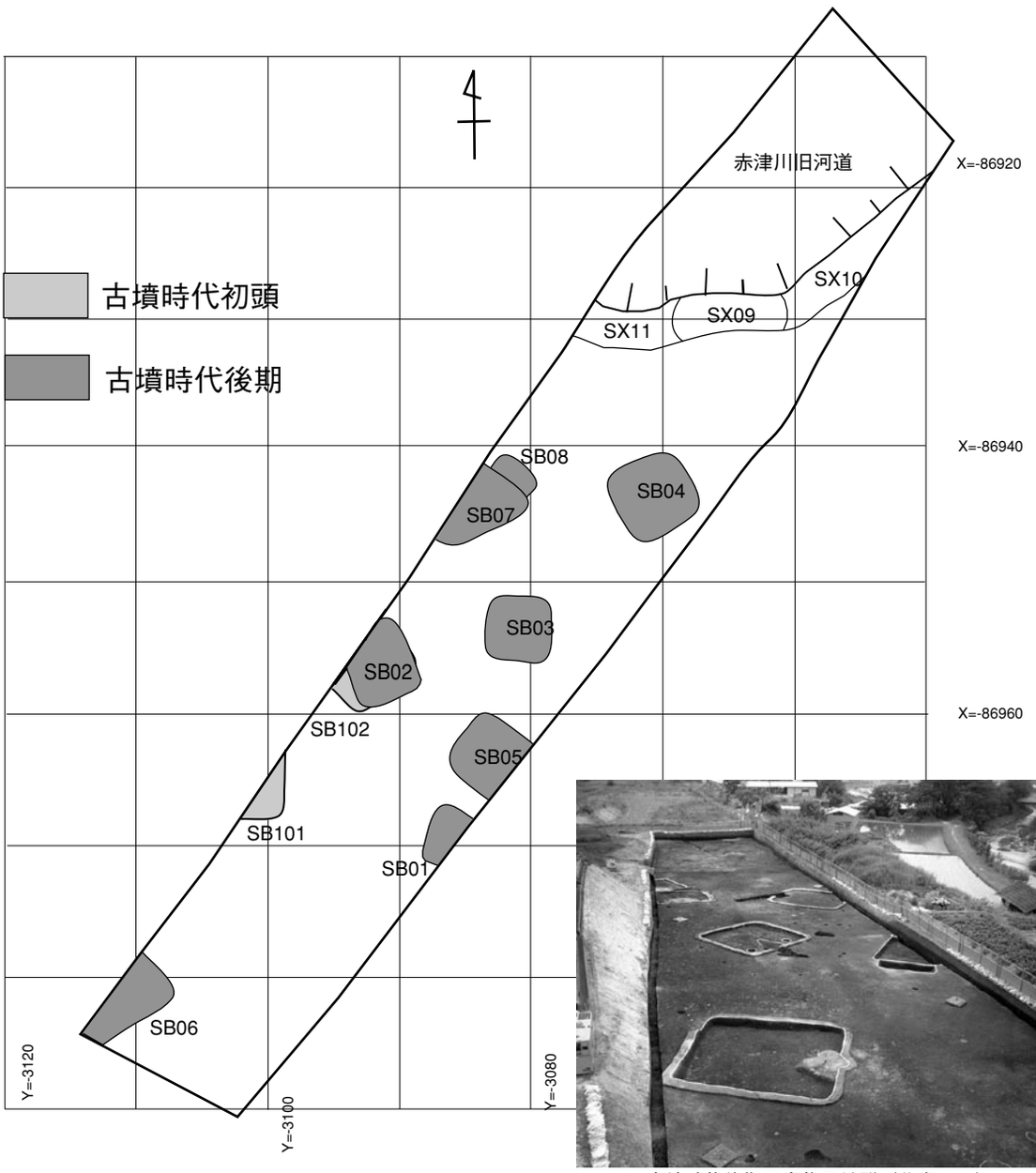
遺構・遺物は縄文時代から中世の時期のものが検出された。縄文時代後期の遺構として

土器埋設遺構が２基検出された。SK94 は、上部は不明であるが下部を欠失した無文深鉢形土器を立位で埋置し、内部に土器片を敷いている。SK132 は、立位の深鉢形土器の底部のみを検出した。また、倒木跡を１基検出し、埋土中より縄文時代後期の土器を検出した。また、中世の掘立柱建物２棟を検出した。SB01 は２間×３間、SB02 は１間×３間である。２棟は南北方向の主軸がやや東に振り、同一方位をとる。SB01 の柱穴より出土した灰釉系陶器 (山皿) から、これらは 12 世紀後半の時期に属するものである。段丘端に近い部分はやや端部に向かって落ち込み、中世の包含層が認められる。包含層中より 13 世紀代の灰釉系陶器 (山茶椀) が検出された。自然地形として南北方向の自然河道が調査区南半に認められた。いずれも 10cm 程度の浅い落ち込みで、白色粗粒砂と細礫を埋土とする。

ま と め　昨年度から遺跡範囲の北部の調査を開始し、今年度は 02A・02B の２調査区を設定した。その結果、これまでの調査では確認されなかった時期の遺構・遺物が検出された。弥生時代から古墳時代初頭の時期の竪穴住居及びこれに伴う遺物は遺跡範囲の南部では認められない。集落の及びこれにともなう遺構の範囲は、北部のみに限定される可能性がある。段丘の連続性及び小河川の谷地形による分断など遺跡の地形的なまとまりの面から本遺跡が大きく２つにわかれることが考えられ、今後の検討課題となる。また、02B 区で確認されたこの時期の集落は、段丘上位面を東北方向に展開することが推定される。予定されている今後の調査で様相を明らかにすることができるものと考えられる。　（酒井俊彦）

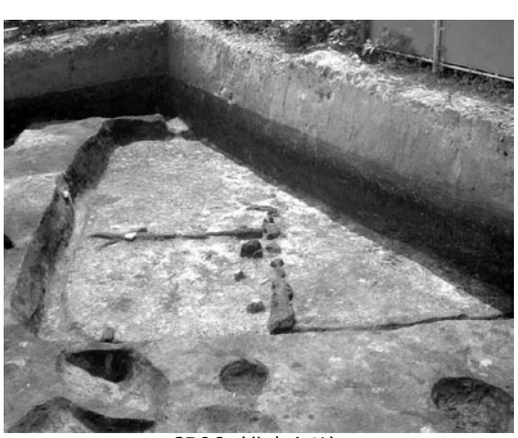


調査区位置図（1:10000）



02A 区主要遺構図　　(1:400)

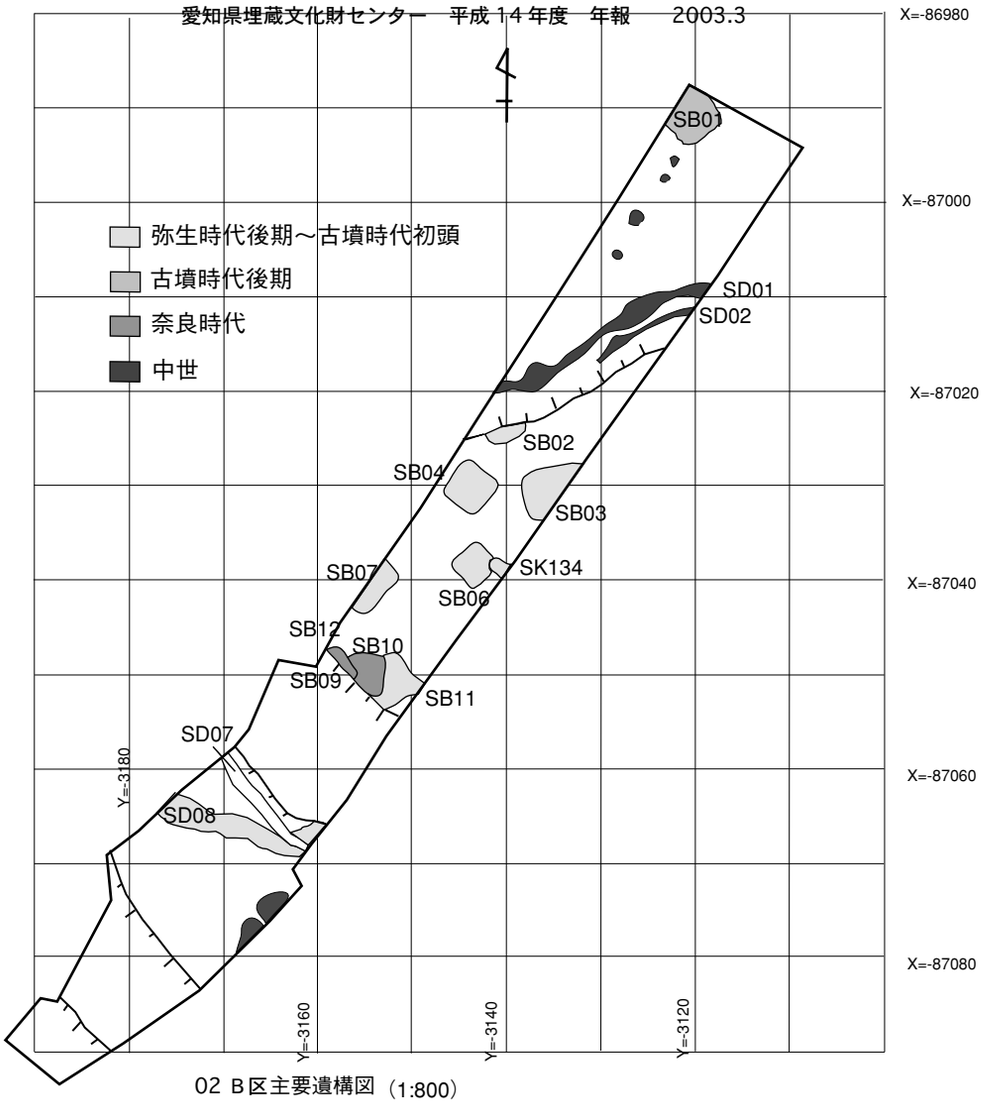
古墳時代後期竪穴住居址群（北東より）



SB06（北東より）



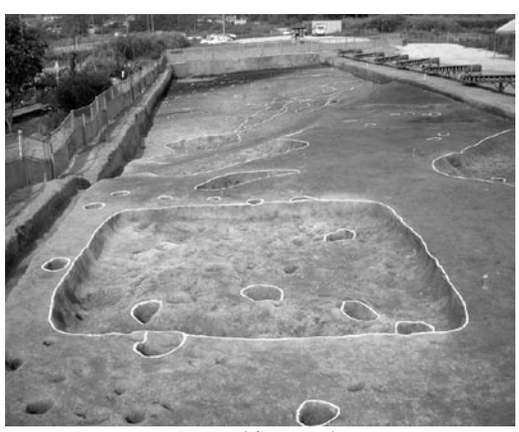
SB04（南より）



02 B区主要遺構図（1:800）



SB03 銅鐸型土製品出土状況（北より）



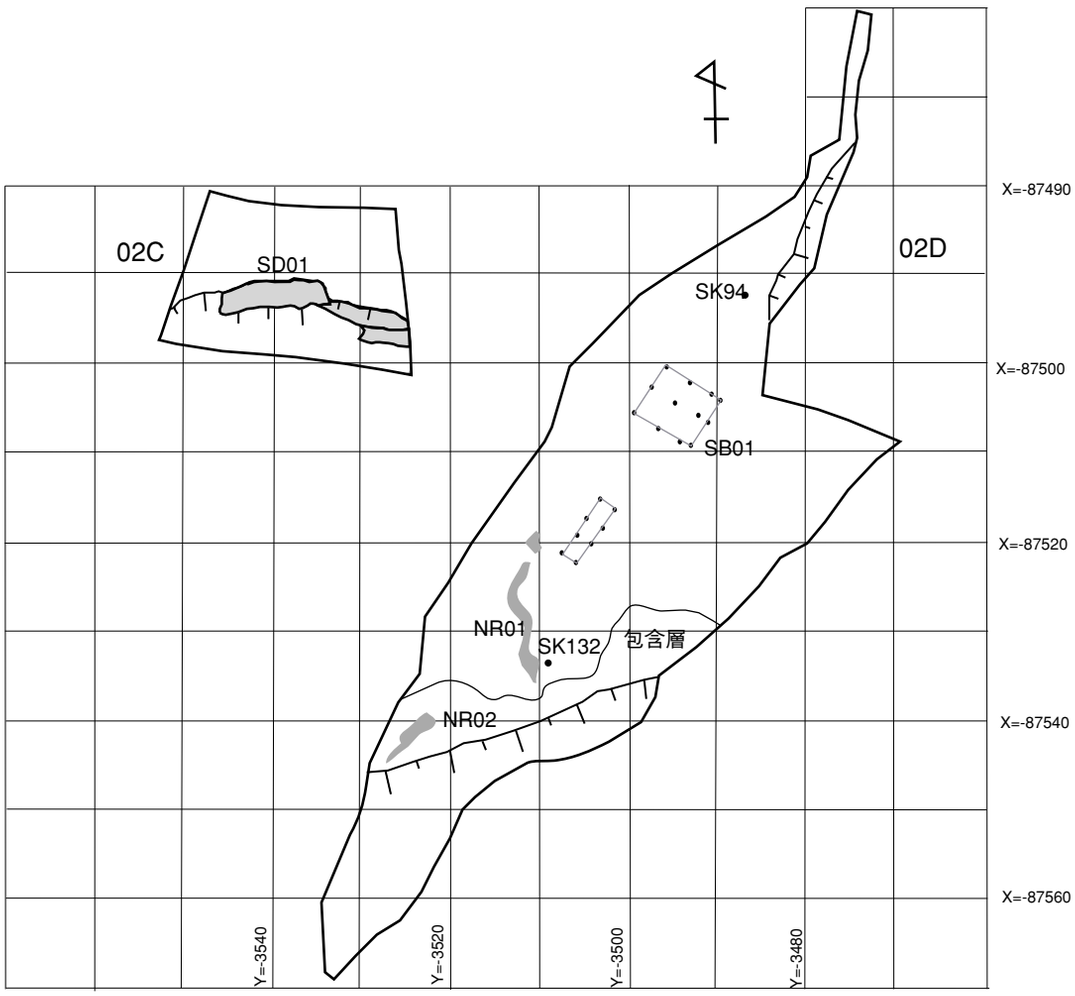
SB04（南西より）



SB03 遺物出土状況（北東より）



SD08（西より）



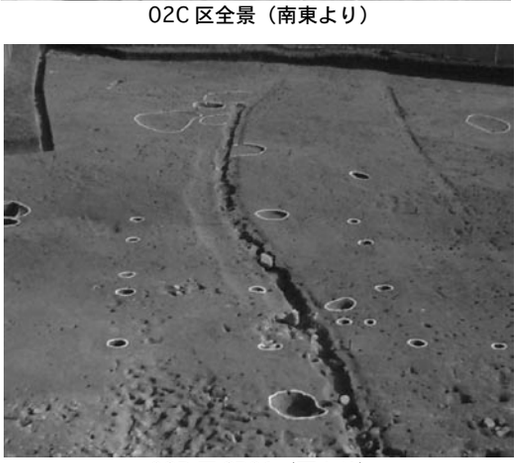
02 C・D 区 主要遺構図（1:800）



02C 区全景（南東より）



02D 区全景（北より）



02D 区 SB01（西より）



SK94 埋設土器（西より）

凧山（たこやま）C 窯跡

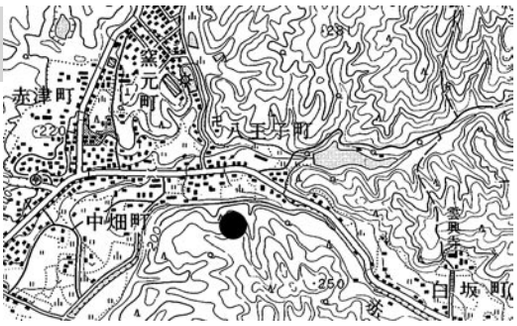
所 在 地　瀬戸市凧山町地内

調査理由　東海環状自動車道建設

調査期間　平成 14 年 4 月～ 7 月

調査面積　700 ㎡

担 当 者　藤岡幹根・宇佐見守・永井宏幸



調査地点（1/2.5 万「猿投山」）

調査の経過　調査は東海環状自動車道建設の事前調査として、国土交通省愛知国道工事事務所より愛知県教育委員会を通じた委託事業として実施した。本窯跡は、平成 13 年 11 月に実施された瀬戸市教育委員会の分布調査により新たに確認され、同年 12 月に実施した範囲確認調査の結果、灰原と窯体の一部が判明した。これを受けて調査面積 700 ㎡を対象とし実施した。

立地と環境　凧山 C 窯跡は瀬戸市の東南部、矢田川の支流である赤津川流域に広がる赤津盆地を囲む丘陵上、凧山町地内に所在する、赤津地区としては窯業生産の最古段階の窯である。窯体は丘陵の南東斜面、標高約 220 mに 2 基、窯直下から斜面末端まで灰原が濃密に広がっている。周辺の遺跡には、鎌倉時代の凧山窯跡と江戸時代の瓶子窯跡、凧山 A 窯跡など窯業遺跡と古代から近世の凧山屋敷遺跡、縄文時代から中世の惣作鐘場遺跡などの集落遺跡がある。

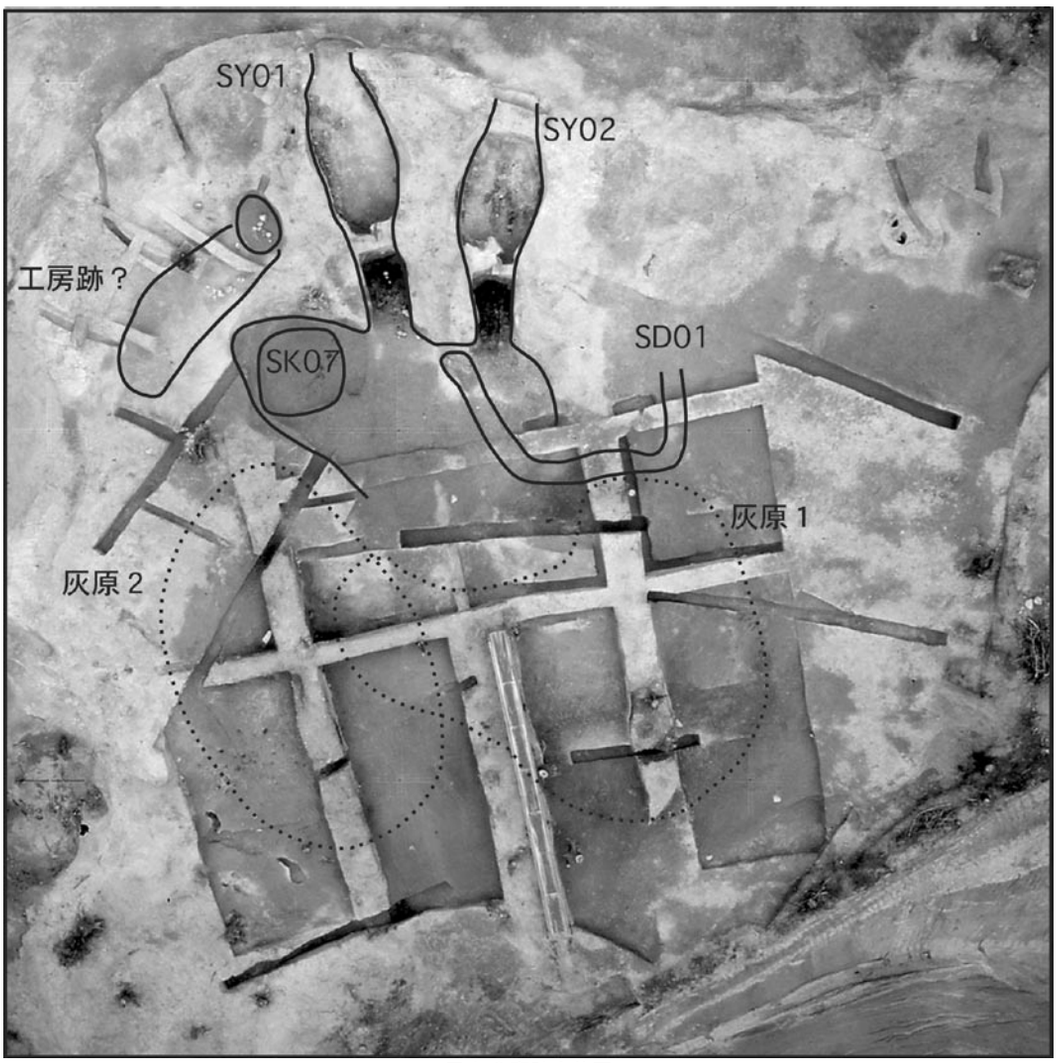
調査の概要　今回の調査では、13 世紀半ば頃（尾張型山茶椀第 7 型式）の窯体 2 基、工房跡・灰原といった灰釉系陶器（山茶椀）生産に関わる遺構群を、良好な状態で確認することができた。また、縄文時代早期と奈良時代の土坑も確認され、注目できる。

遺　　構　**窯体**：南北に隣接して 2 基（北：SY01 、南：SY02）が確認された。2 基とも焚口から焼成室まで確認でき、煙道部は削平され残存していなかった。窯体の規模は全長 7 m（推定）、最大幅約 2 mを測る。2 基の窯はその新旧関係から、SY02 → SY01 の順で構築されている。窯体手前の前庭部には排水路（SD01）が見つかっている。この排水路から灰と釉着した椀や椀を重ねて廃棄された遺物が多数出土した。

工房跡：SY01 の北西側にテラス状に掘り込まれた長方形の平坦地。ロクロピットなど作業施設に関わる遺構は確認できなかったが、窯に隣接して平坦面を築いていることから工房跡を推定した。

灰原：焼成不良な陶器や灰などを捨てた灰原は、窯体前庭部より谷側にかけて、大きく 2 ヶ所にわたり広がりが見られた。盗掘坑がほとんどみられず、当時の灰原が極めて良好な状態で遺存していた。概ね、SY02 の灰原は南東側（灰原 2）、SY01 の灰原は北西側（灰原 1）に対応する。南東側の灰原は窯体を構築した時に地盤を削りだした土（斑土層）が確認できる。灰層 1 層で 1 回の操業と試算すると、灰層は全体で 5 層（灰原 1 に 3 層、灰原 2 に 2 層）確認でき、最低 5 回の操業が推定できる。

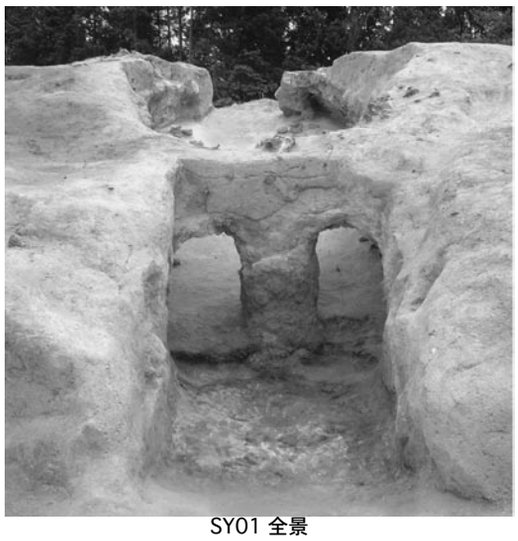
出土遺物　遺物収納コンテナ（27 ﾘｯﾄﾙ）で約 450 箱にのぼる。無釉の陶器（山茶椀）である椀・皿を中心に、陶丸や古瀬戸瓶子・四耳壺などが出土している。　（永井宏幸）



凩山 C 窯跡全体図



凩山 C 窯遠景


SY01 全景


SY01 分焔柱（焼成室から）


SY01 焼成室遺物出土状況


SY01 焼成室焼台出土状況


SY01 焼成室焼台出土状況


SY02 全景


SY02 分焔柱補強後


SY02 分焔柱補強前


SY02 分焔柱


SY02 焚口付近遺物出土状況


SY02 前 SD01 遺物出土状況


灰原全景（灰原 1 東から）


SK07 遺物出土状況


SD02 遺物出土状況（工房跡？）


SK11 全景（奈良時代）


SK12 全景（縄文時代早期）

吉野（よしの）遺跡

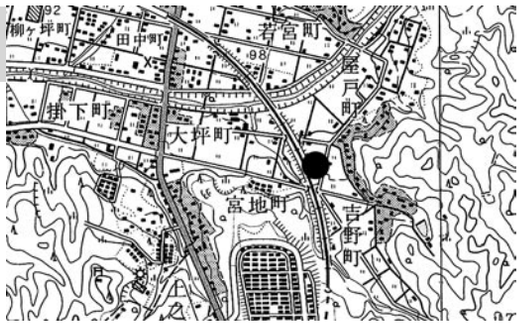
所 在 地　瀬戸市屋戸町

調査理由　国道 248 号建設

調査期間　平成 14 年 10 月～平成 15 年 2 月

調査面積　2,300 ㎡

担 当 者　藤岡幹根・鵜飼雅弘・永井宏幸



調査地点（1/2.5 万「瀬戸」）

調査の経過　調査は国道 248 号建設に先立ち、愛知県建設部道路建設課から愛知県教育委員会を通じて委託を受け、平成 12 年度から実施している。過去２年の調査では、弥生時代中期の水田跡、古墳時代前期の柵状遺構を伴う自然流路、中世の土坑などが検出されている。瀬戸市教育委員会の遺跡分布地図によると、昨年度までの調査区は吉野遺跡、今回の調査区は屋戸町遺跡とされていたが、関係機関との協議の結果、吉野遺跡の一部として調査を進めることになった。

立地と環境　遺跡は、矢田川（山口川）により形成された沖積地である山口谷の南東部、山口川にそそぐ吉田川の右岸、標高 100m 前後に立地する。今回の調査区は、過去２年の調査区の北側に位置する。

調査の概要　本年度の調査は、調査区を南北に縦断する水路を挟んで東側を 02A 区、西側を 02B 区として実施した。

調査の結果、本年度の調査区でほぼ完結する微高地上に、縄文時代中期後葉から後期前葉を中心とする遺構が展開することが明らかになった。

調査区の現況は水田で、昭和 30 年代の耕地整理により地形が改良されていた。そのため、昨年度までに確認されていた中世の遺構群はほとんどが削平され、02B 区に深い遺構が若干残存する程度であった。

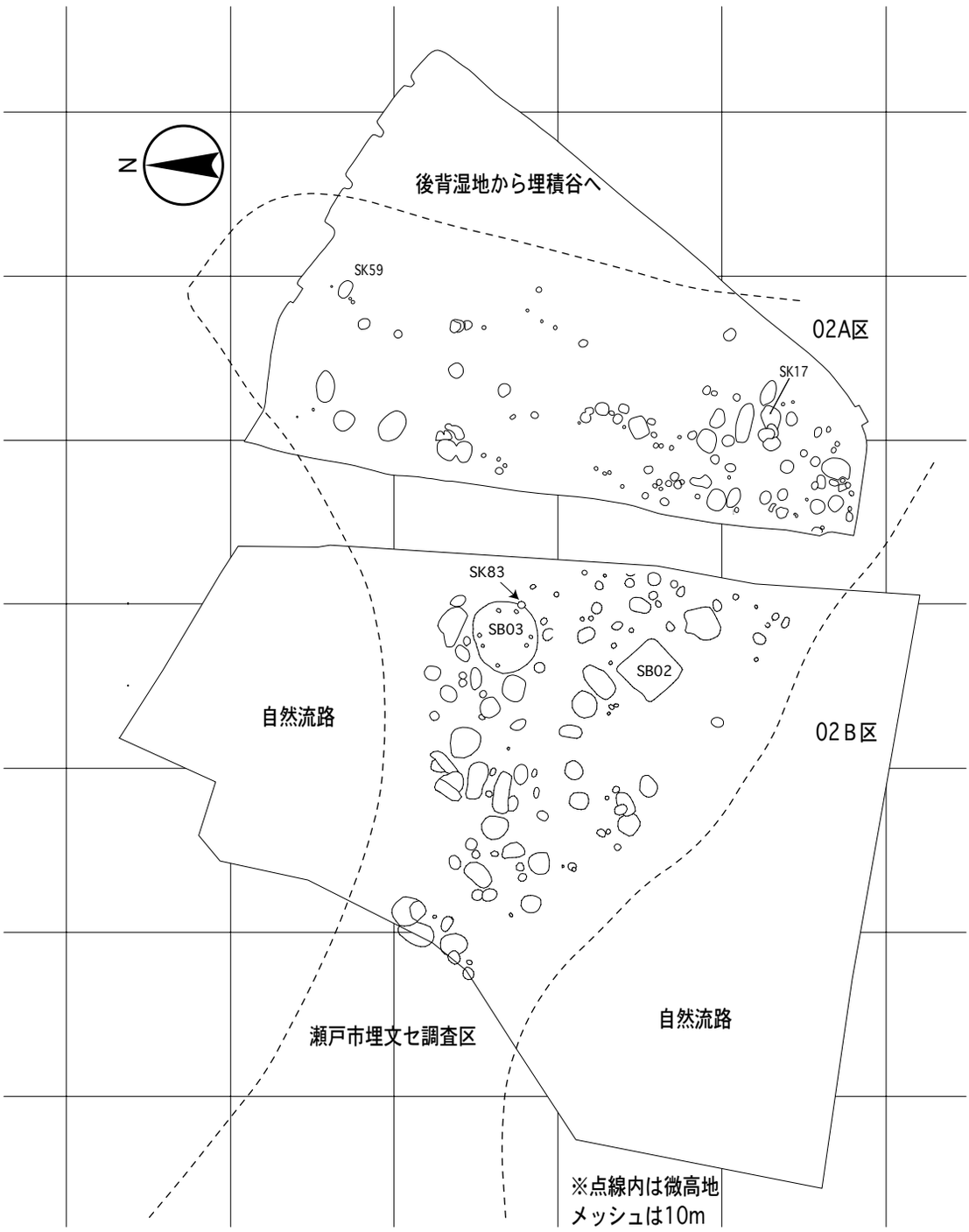
縄文時代の遺構としては、両調査区にまたがって多数検出された土坑群が目立つ。なかには、02A 区 SK17 、02B 区 SK83 のように土器が埋設された状態で確認できる遺構が数基含まれる。また、02A 区 SK59 のように破損した石皿など大型石製品が集積した土坑もみられる。土坑内資料はほとんどないが、出土した遺物に、切目石錘や磨製石斧が目立ち、ついでチャート製の剥片が多い。最も注目される遺構としては、02B 区 SB02・03 があげられる。SB02 は 2m 四方の方形プランで中心部に石囲炉をもつ竪穴遺構である。主柱穴は確認できなかったが、石囲炉は被熱痕があり、住居の可能性が高い。一方 SB03 は直径約 3m の円形プランで中心部に炉がない。ただし、主柱穴と考えられる 4 箇所のピットがあり、竪穴住居と考えた。さらに SB03 内および周辺から褐鉄鉱（鬼板の一種）が数ヶ所、赤色塗料の付着した磨石、赤彩された土器片が出土している。したがって、SB03 はベンガラを塗布するための施設であった可能性が示唆できる。

中世の遺構は、02B 区の西側に隣接して実施された瀬戸市埋蔵文化財センター調査区に続く、東西の溝（SD03）や土坑数基を確認した。

また、耕地整理以前まで使用されていた石積の水路を南北方向に２条、東西方向に２条

確認した。このうち、00A 区の SD01 は現存する南北水路に沿って確認でき、胴木を基礎とした石積の水路であった。

ま と め　本年度の調査成果としては、瀬戸市内では希少な縄文時代中期後葉から後期前葉にかけての遺構・遺物が確認できたこと、さらにこれらの遺構群が約 1,500 ㎡の微高地上に展開していることがあげられる。そして遺跡の規模や立地、剥片石器・切目石錘の出土から考えて、定住的な居住地ではなく、漁撈活動を中心としたキャンプ地的な性格の居住地を想定したい。（永井宏幸）



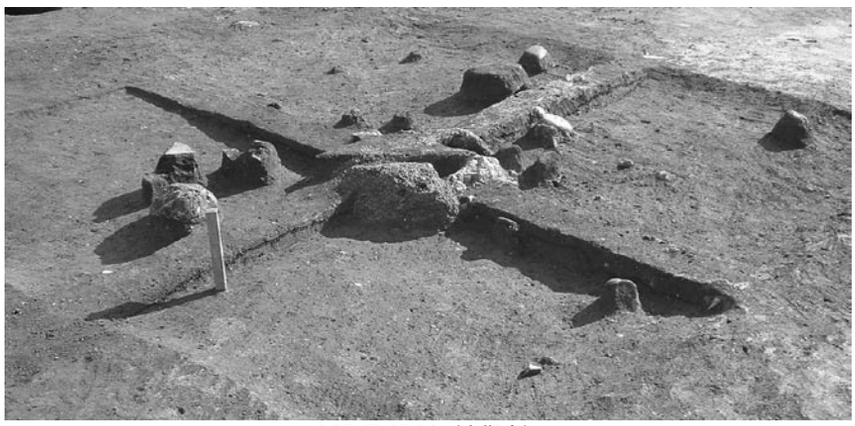
吉野遺跡 02 調査区縄文時代遺構全体図（1:400 ）



02A 区 SD01（近代以降の水路）



02A 区 SK17（中期後葉の埋設土器）



02B 区 SB02（中期末）



02A 区 SK59（石皿などが出土した土坑）



02B 区 SB03（褐鉄鉱などが出土した後期前葉の円形竪穴住居住居）



02BSX02・03（近代以降の水路）



02B 区 SK83（SB03 に隣接する埋設土器）



02B 区縄文時代全景（北西から）



02B 区中世以降全景（北西から）

朝日（あさひ）遺跡

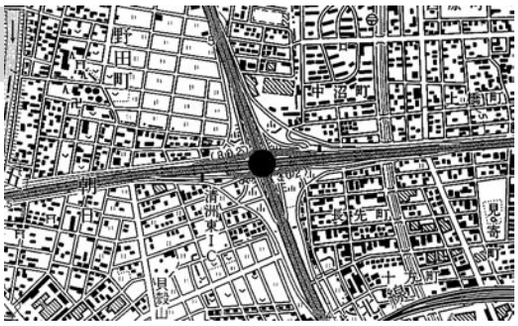
所在地　西春日井郡清洲町、新川町、春日町、名古屋市西区

調査理由　近畿自動車道清洲 JCT 建設
県道高速清洲一宮線建設

調査期間　平成 14 年 4 月～平成 15 年 3 月

調査面積　3,877 ㎡

担当者　赤塚次郎、鈴木正貴、樋上昇、蔭山誠一



調査地点（1/2.5 万「清洲」）

調査の経過

近畿自動車道清洲 JCT 建設および県道高速清洲一宮線建設に伴い、朝日遺跡にかかる部分について事前調査を行う必要があった。そこで平成 10 年度から日本高速道路公団・名古屋高速道路公社より愛知県教育委員会を通して委託された当埋蔵文化財センターにおいて発掘調査を実施している。今年度の調査は平成 10 年度年報における朝日遺跡「調査区の表記について」に準じて A 区に 02Aa 区～ 02Ag 区の 7 ケ所、B 区に 02Ba 区～ 02Be 区、02Bg 区～ 02Bj 区の 9 ケ所、C 区に 02Cb 区～ 02Ch の 7 ケ所、D には 02Da 区～ 01De 区の 5 ケ所の併せて 28 ケ所の調査区を設定し、3877 ㎡を調査した。調査期間は平成 14 年 4 月から平成 15 年 3 月である。



平成 14 年度発掘調査区位置図

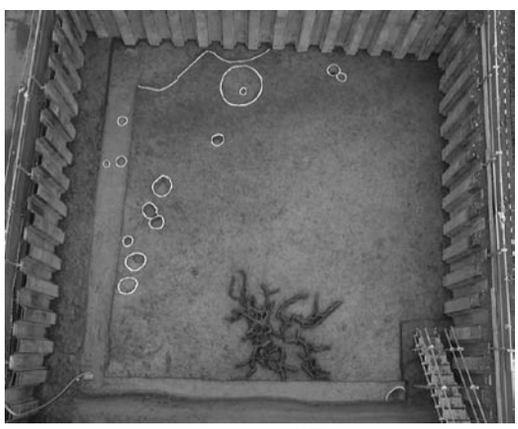
立地と環境

朝日遺跡は西春日井郡清洲町を中心に同春日町、新川町、名古屋市西区に広がる東海地方屈指の弥生時代集落で、現在では五条川左岸の後背湿地にあたる地域となっている。

調査の概要

弥生時代～古墳時代

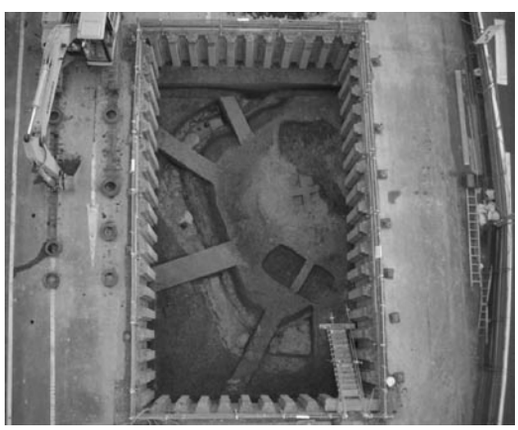
02Aa 区・02Ae 区・02Af 区と 02Ba 区は「北居住区」東の環濠帯の北東外側にあたり、02Aa 区では弥生時代の方形周溝墓の周溝と思われる溝 1 条が検出され、02Af 区では弥生時代中期後葉の方形周溝墓 1 基とその下面から土坑等が検出された。02Ba 区では古墳時代前期後半の自然流路とその流路に切られている水田跡を検出した。水田跡は弥生時代に遡る可能性が高いもので、朝日遺跡における初めての検出である。水田一筆は一辺 2 ～ 3m 程の小区画水田で 10 筆確認された。



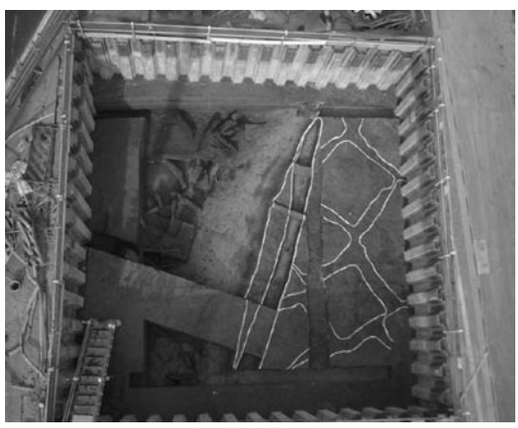
Aa 区 1 面全景



Af 区 1 面方形周溝墓の周溝掘削



Af 区 1 面全景



Ba 区 1 面全景



Ba 区 1 面水田跡



Ba 区 1 面水田跡土壌サンプリング

02Ab 区～ 02Ad 区と 02Ag 区、02Bb 区～ 02Bd 区は弥生時代中期中葉と弥生時代後期に「北居住区」東の環濠帯とされてきた部分にあたる。02Ac 区の南西隅と 02Ad 区の中央部から東側において検出された溝は同一のものと考えられ、従来の調査では弥生時代中期前葉～中葉の最も内側の環濠と考えられる。同様に 02Ac 区の中央部から東側に検出された溝は弥生時代中期中葉･弥生時代後期の内から 2 番目の環濠に、02Ag 区と 02Bd 区において検出された 2 条の溝は弥生時代中期中葉・弥生時代後期の内から 3 番目と 4 番目の環濠に、02Ab 区の南西隅に検出された溝は弥生時代中期中葉・弥生時代後期の内から 4 番目の環濠に、02Bc 区の西側と 02Bb 区の南西隅に検出された溝は弥生時代後期の内から 5 番目（最外縁）の環濠に対応するものと思われる。



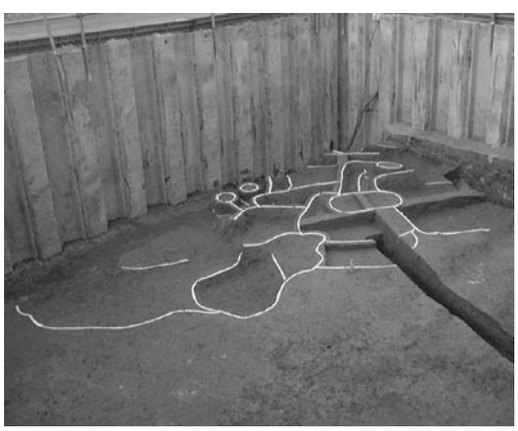
Ab 区 3 面全景



Ac 区 2 面の溝掘削



Ac 区 2 面全景



Ad 区 2 面全景

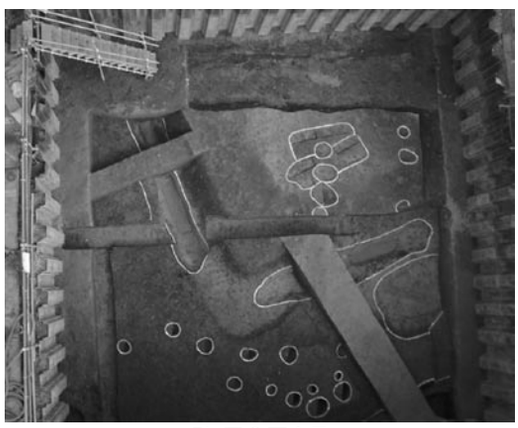


Ad 区 5 面全景

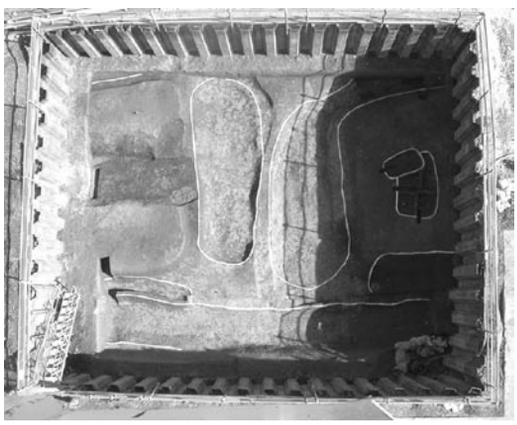


Ag 区 2 面全景

この中で02Bd区の内から３番目の弥生時代後期の環濠において有肩袋状鉄斧が出土した。また、これらの調査区は弥生時代中期後葉において墓域化していたようであり、方形周溝墓が 02Ab 区・02Ad 区・02Af 区・02Bb 区・02Bd 区に各 1 基、02Bc 区に 2 基検出され、同時期の土坑墓や土器棺墓も 02Ab 区・02Ag 区・02Ac 区において検出された。これらの方形周溝墓は弥生時代中期中葉の環濠が埋没した後に周溝を掘削しており、02Bd 区の方形周溝墓のように環濠と環濠の間にある高まり（堤）部分を利用したものもある。02Ad 区の環濠の集落側において弥生時代中期末～弥生時代後期の竪穴住居や土坑を検出し、「北居住区」の居住域がここまで展開することが明らかに出来た。



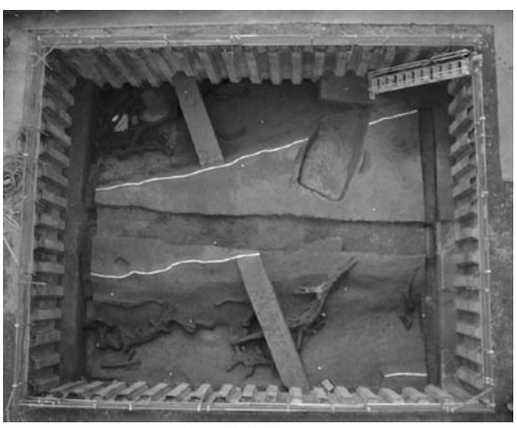
Bb 区 2 面全景



Bc 区 1 面全景



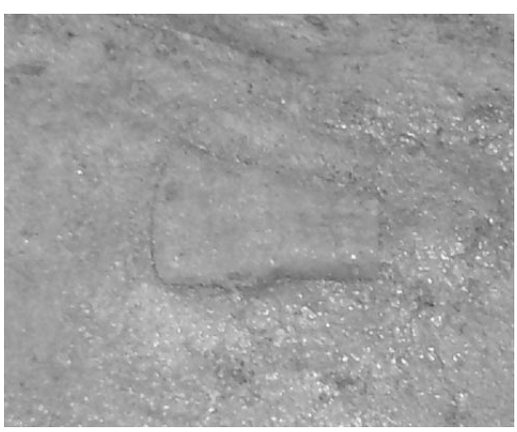
Bd 区 1 面中世の方形土坑



Bd 区 2 面全景



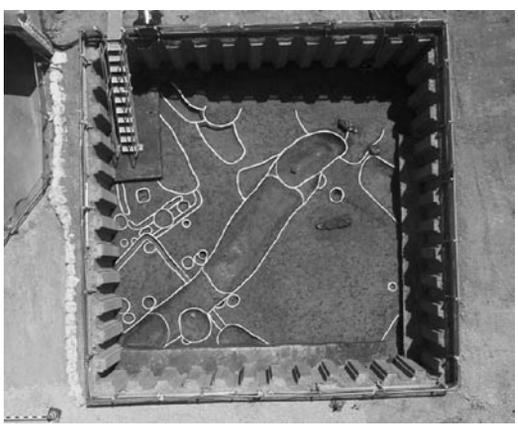
Bd 区 2 面環濠掘削



Bd 区 2 面環濠出土袋状鉄斧

02Bg 区は谷 A の北肩部分にあたるものと思われ、谷を流れる流路が微妙に流れを変え、徐々に埋まっていく過程が観察された。谷 A の上層では弥生時代後期の流路が確認され、下層では弥生時代中期前葉を中心とする流路が 3 条検出された。

02Be 区と 02Bh 区～ 02Bj 区は谷 A を挟んで弥生時代中期の東墓域が広がる部分で、02Bh 区においてかって調査された大型方形周溝墓の北周溝とその北に広がる小規模な方形周溝墓と思われる溝や土坑などを検出した。02Be 区・02Bi 区・02Bj 区では弥生時代中期前葉～中葉の竪穴住居や土坑、その後形成された弥生時代中期中葉～弥生時代中期後葉の方形周溝墓が確認された。また 02Be 区では弥生時代中期の方形周溝墓の周溝と重複するかたちで堆積した弥生時代後期以後の溝に囲まれた高まりの中で弥生時代後期と思われる横臥屈葬の人骨が 1 体出土した。



Be 区 3 面全景



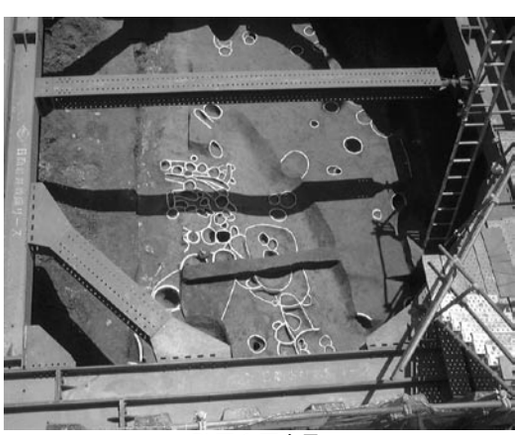
Bg 区 3 面谷 A



Bg 区 3 面谷 A に堆積した貝層



Bh 区大型方形周溝墓の北周溝断面



Bi 区 1 面全景

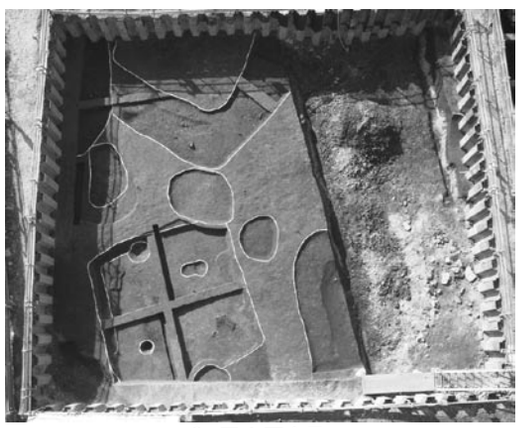


Bj 区 2 面方形周溝墓の周溝掘削

02Cb 区～ 02Cd 区・02Cg 区は「南居住区」から南東へ外に出た部分で、02Cb 区では弥生時代中期中葉～中期後葉の竪穴住居と土坑とそれらより新しい弥生時代中期後葉の方形周溝墓の周溝やさらにその方形周溝墓の溝を切って流れた自然流路が検出された。この自然流路はこれまで谷 B とされてきたものに対応し、弥生時代中期中葉以後の洪水堆積の後弥生時代後期～古墳時代前期にかけて流れているようである。02Cc 区と 02Cd 区は隣接する調査区で、弥生時代中期中葉～中期後葉の竪穴住居や土坑と、弥生時代中期後葉～弥生時代後期の方形周溝墓が 5 基検出された。02Cc 区では古墳時代前期の竪穴住居 1 棟が確認され、朝日遺跡の中では大型に分類される一辺約 6m の焼失家屋であった。02Cg 区では弥生時代中期中葉の溝（幅 3.2m 前後、深さ 1.5m 前後）1 条とマウンドの隅部が陸橋状になる方形周溝墓を 2 基確認した。



Cb 区 2 面南側



Cc 区 1 面全景



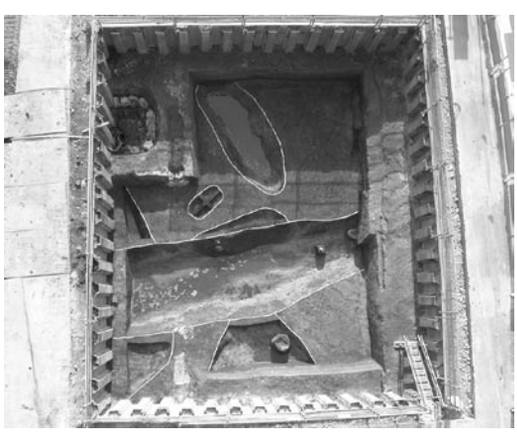
Cc 区 3 面全景



Cc 区 3 面方形周溝墓の周溝出土土器



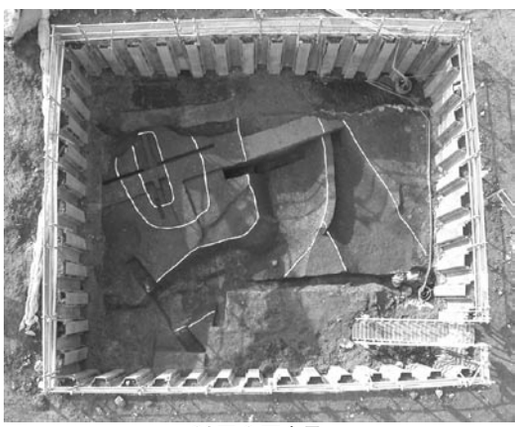
Cd 区 1 面全景



Cg 区 1 面全景

02Cf 区・02De 区は「南居住区」の南縁辺部にあたる部分で、02Cf 区において弥生時代中期前半の環濠と思われる溝、02De 区において弥生時代後期前半の環濠が検出された。02Cf 区は溝が埋没した後、弥生時代中期後葉の土坑が掘削され、弥生時代後期には方形周溝墓が築かれていた。弥生時代後期の方形周溝墓のマウンド上では主体部と思われる土坑が検出され、ガラス小玉や人骨が出土した。02De 区では弥生時代中期前葉～弥生時代中期後葉の竪穴住居が 10 棟、土坑が約 90 基と環濠より新しい弥生時代後期～古墳時代前期の竪穴住居 1 棟と土坑も確認された。

02Ce 区・02Dc 区・02Dd 区は「南居住区」の内部に位置し、02Dc 区では、弥生時代中期前葉～古墳時代前期前半の竪穴住居約 100 棟、土坑約 500 基を検出した。02Dd 区



Cf 区 2 面全景



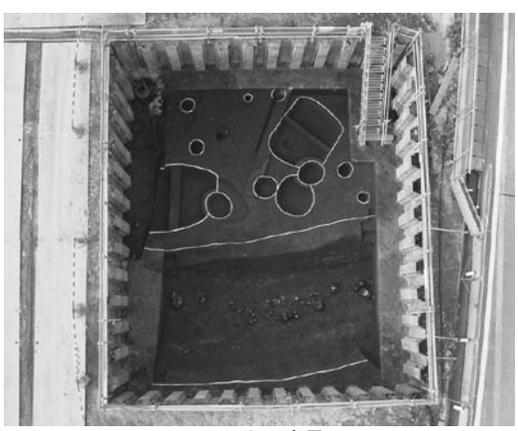
Cf 区 2 面方形周溝墓



Cf 区 3 面全景



De 区 1 面環濠遺物出土状況



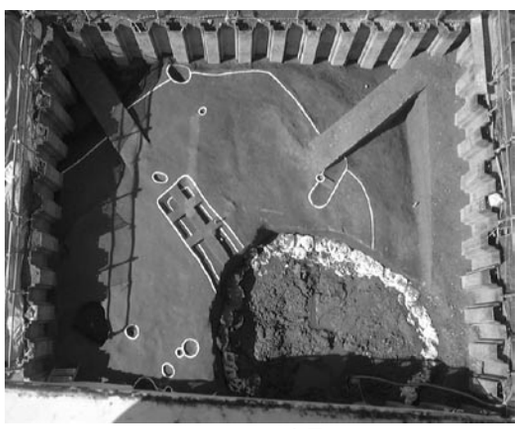
De 区 2 面全景



De 区 3 面環濠出土弥生土器

では弥生時代中期前葉～古墳時代前期前半の竪穴住居 10 棟程と土坑約 150 基、弥生時代中期前半の区画溝 1 条を検出し、弥生時代後期の巴形銅器が出土した。02Ce 区は調査区のほとんどを近年の撹乱によって破壊されていた。残存した部分は遺物包含層が約 0.75m あり、出土した弥生土器は弥生時代中期前半と弥生時代後期後葉に区分できる。

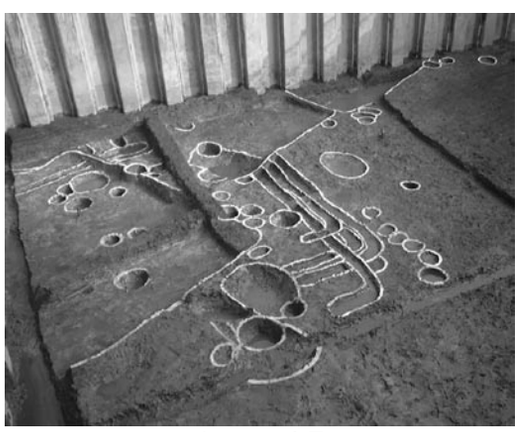
02Da 区と 02Db 区は「南居住区」の西外側に展開する西墓域にあたる部分で、02Da 区は弥生時代中期後葉～後期の方形周溝墓 1 基、弥生時代中期中葉の溝 2 条、土坑多数を検出した。02Db 区は弥生時代中期中葉～後葉の貝層の腐食したものと炭化物を多く含む堆積が北にある谷 A に向かって傾斜して堆積し、その上部において弥生時代中期中葉～弥生時代中期後葉の竪穴住居約 75 棟、土坑約 150 基を検出した。方形周溝墓などは検出されなかった。



Da 区 1 面全景



Db 区 1 面遺構掘削



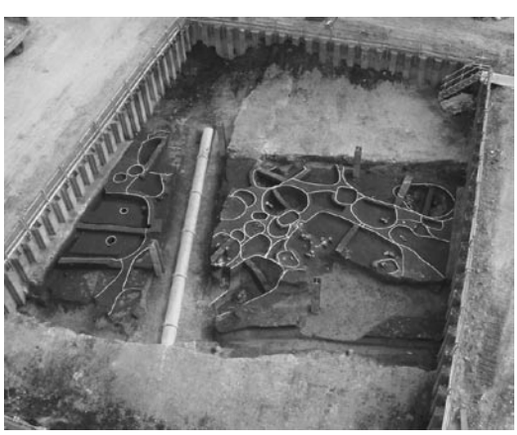
Db 区 4 面全景



Dc 区 2 面全景



Dc 区 4 面測量

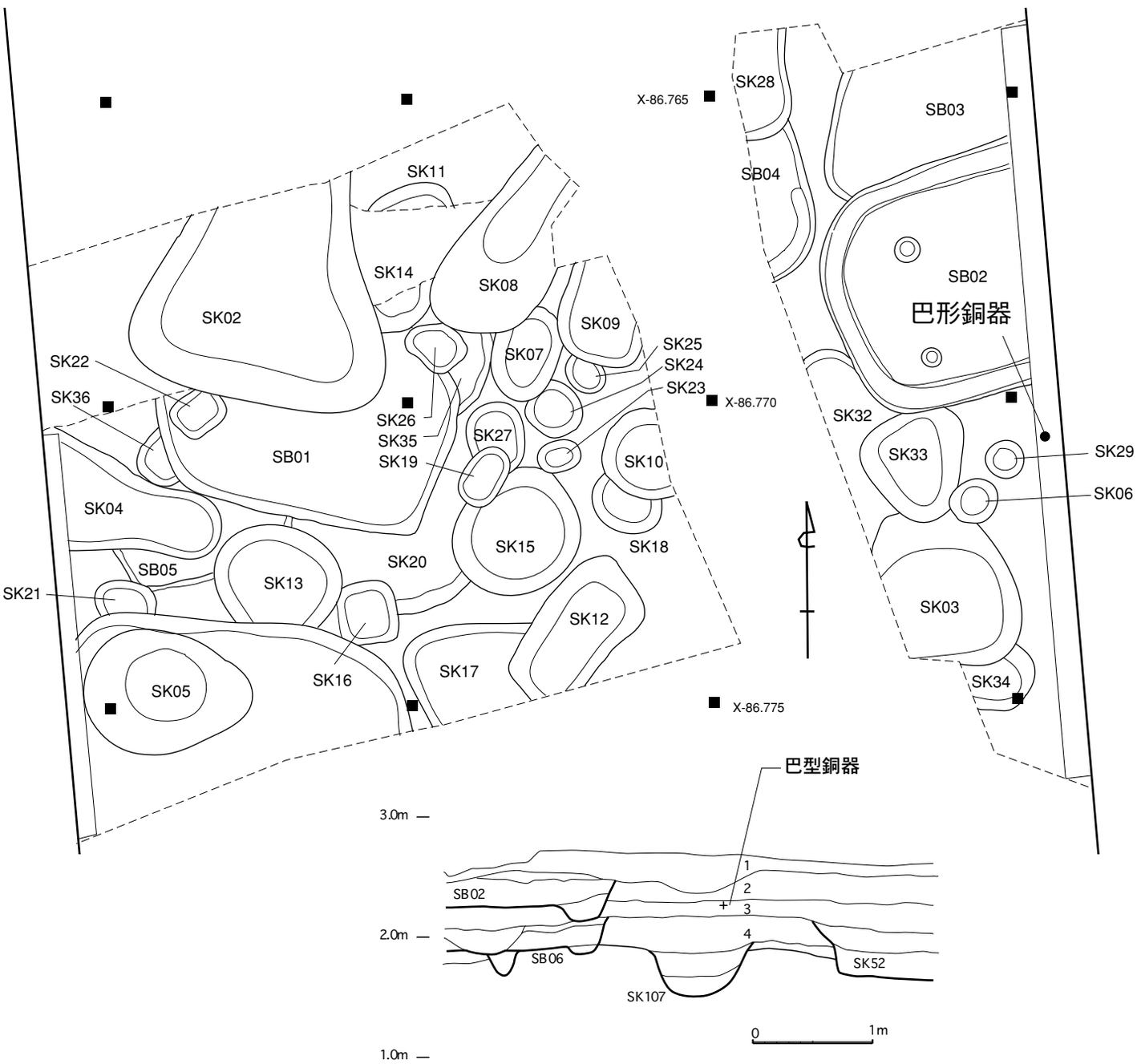


Dd 区 1 面全景

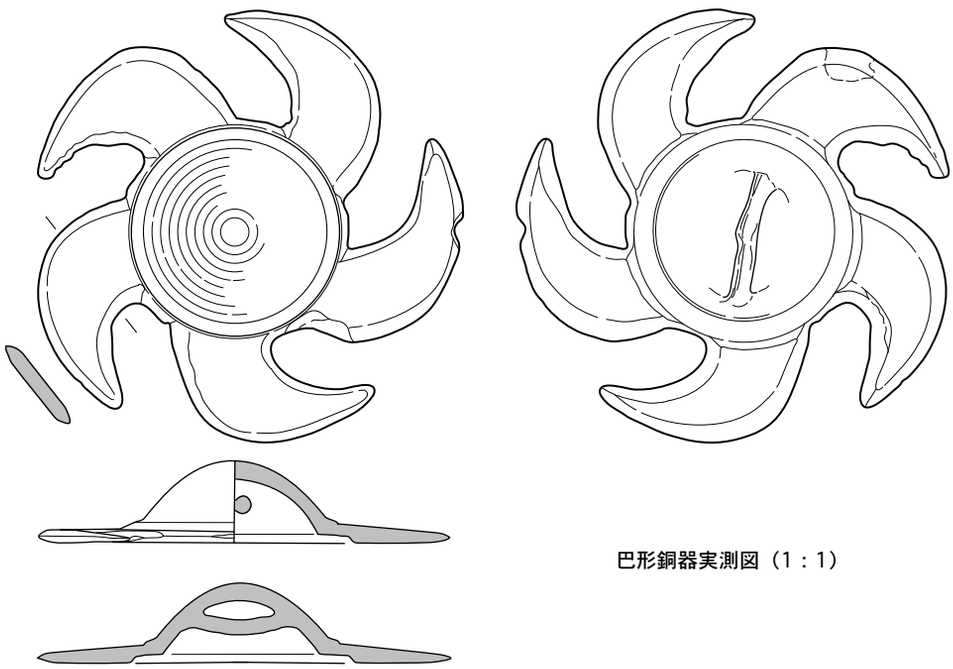
02Dd 区出土の巴型銅器

（1）出土状況と所属時期

出土地点は、調査区 02Dd 区竪穴住居 SB02 の南側に近接し、調査区を囲むシートパイルに設定したセクションベルト内 (包含層) で巴形銅器は表面を上にしてほぼ水平に置かれたような形状で出土した。層位的には、断面図から明らかなように、第 3 層上位に位置し、第 2 層から掘削されている竪穴住居 SB02 からは山中 I 式 1 段階の高杯が床面上から出土している。また同一遺構検出面では、SB02 に重複する SK33 から、山中 I 式 2 段階の資料が確認できる。さらに第 4 層から掘削された SK52 は、弥生中期末葉の高蔵式期の土器を包含する。したがって層位的には山中 I 式期から高蔵式の間に位置づけることが可能である。遺構配置や層位を総合すると、巴形銅器の所属時期は、山中 I 式 2 段階を中心とする時期を想定しておきたい。



上：02Dd 区 1 面遺構平面図（1：100）、下：02Dd 区東壁セクション（1：50）



巴形銅器実測図（1：1）

（2）巴形銅器の特徴

5 脚左捩半球形座棒状鈕巴形銅器であり、巴径は 5.6cm で座径は 3.0cm 、高さ 1.1cm を測る。全体の形状が残り、保存状況も極めて良好な資料である。表面は全体に研磨痕跡が著しく光沢をおびる。半球形座の座縁部には段が見られる。内面は二次的な研磨痕跡がほとんど見られず、鋳出した状況をそのままとどめているものと思われる。座の中央部には棒状鈕が見られ、座内面と脚との間には 4mm ほどの一段の窪んだ平坦面が存在する。脚の端部は内外両面ともに 2mm ほどの斜面が認められる。こうした微小な段差や斜面からは、巴形銅器の上下鋳型の形状を復原することができ、鋳型の両面に巴形銅器の脚部を含めた輪郭線が丁寧に描かれていたことを類推することができる。脚部は幅広で、短く鋭く捩じる形態を留める。各脚との間には脚幅ほどの間隙を置き、バランス良く配置されている。以上の形態的な特徴の中で、特筆できるものを整理すると以下のようにまとめることができる。座縁部の段の存在、均等に配置され幅広で短く鋭く捩じる脚部。上下の鋳型に加工が施されたことによって生じた、脚端部両面に残る斜面と座内面の窪んだ平坦部の存在。以上の諸点はいずれも弥生後期巴形銅器の古相を主張する要素として指摘されてきたものと考えることができる。最も類似する資料としては佐賀県唐津市桜馬場遺跡出土品 A と考えることができるが、5 脚という点と棒状鈕、座内面の窪んだ平坦部の存在などは他に例を見ない特異なものである。また巴形銅器の内外面には赤色顔料が付着しており、分析の結果からは、ベンガラであることが判明している。出土地点での観察所見からは、周囲に赤色顔料が見られないことから、付着した顔料は、使用時におけるものであることが想定できよう。

中　　世　中世の遺構は弥生時代～古墳時代の遺物包含層の上から掘削されるもので、方形土坑と水田跡とそれに伴う溝がある。方形土坑は 02Ac 区 3 基、02Ad 区 5 基、02Ag 区 2 基、02Af 区 1 基、02Bc 区 1 基、02Bd 区 4 基、02Bj 区 2 基、02Db 区 2 基、02Dc 区 1 基の計 21 基検出された。また 02Cb 区において谷 B 埋没後の中世後半の水田跡とそれに伴う溝を土層観察にて確認した。（蔭山誠一）

三ヶ所（さんがせ）遺跡

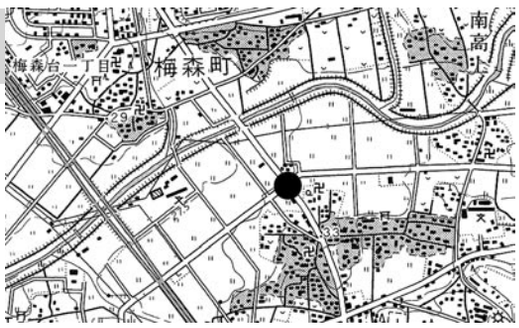
所 在 地　日進市浅田町地内

調査理由　県道岩崎名古屋線建設

調査期間　平成 15 年 2 月

調査面積　370 ㎡

担 当 者　藤岡幹根・永井宏幸・鵜飼雅弘



調査地点（1/2.5 万「平針」）

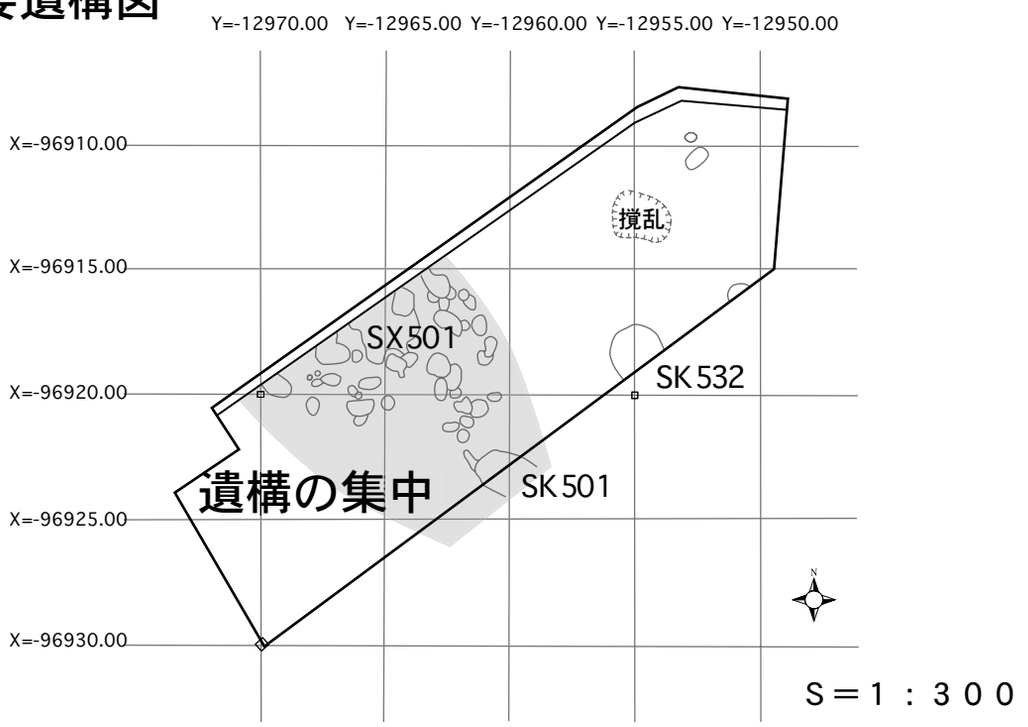
調査の経過　調査は県道岩崎名古屋線建設に伴う事前調査として、愛知県建設部道路建設課より委託を受けて、平成 15 年 2 月に実施した。調査面積は 370 ㎡である。昨年度の調査では、平安時代中期から中世初頭にかけての溝・土坑を検出した。

立地と環境　三ヶ所遺跡は日進市の西部、浅田町地内に所在する。遺跡は岩崎川・天白川・折戸川の合流地点よりやや下手に位置し、これらの河川によって開削された浅い谷に立地する。調査地点の周辺は水田が卓越する地帯である。現地標高は約 28.0m を測る。

調査の概要　基本層序は現水田耕作土約 0.2m 、旧耕作土約 0.1m の下に明黄褐色砂質シルトが約 0.15m 前後堆積するが、調査区西端では旧耕作土直下に基盤層が乗り、削平を受けているものと思われる。この直下に山茶椀・灰釉陶器・須恵器などの遺物を包含する灰白色砂質シルトが堆積する。また調査区中ほどから東側にかけてほぼ南北方向に緩やかに落ち込み、褐灰色砂質土が約 0.1 ～ 0.15m 堆積する。基盤層は明黄褐色砂質土で、その下層に円・角礫を多く含む明黄褐色砂質土が堆積する。

今回確認された遺構は、平安時代中期を中心に土坑 40 余基、不定型の掘り込み 1 基であり、調査区やや西よりに集中していた。このうち SK501 は下層に炭化物を多く含み、上層の褐灰砂質シルト層からは須恵器甕、甑、灰釉椀など遺物がややまとまって出土した。また SX501 は、昨年度調査地点の掘り込みと同時期のものと考えられる。出土遺物は須恵器・灰釉陶器・山茶椀などである。（鵜飼雅弘）

主要遺構図





遺構検出状況



SK501 出土状況



SX501 完掘状況



遺構掘削風景

上橋下遺跡（かみはしか）

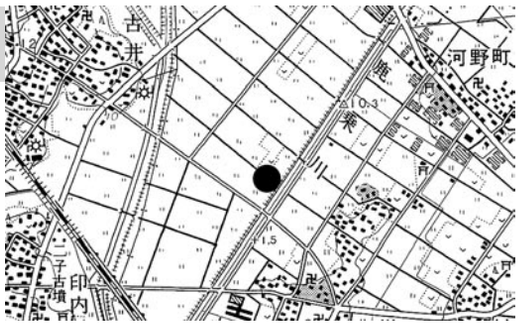
所 在 地　安城市川島町・古井町

調査理由　鹿乗川改修

調査期間　平成 15 年 1 月～3 月

調査面積　600 ㎡

担 当 者　宮腰健司・成瀬友弘



調査地点（1/2.5 万「安城」）

遺跡の環境　上橋下遺跡は、鹿乗川右岸に形成された標高約 8.8 mの沖積低地の微高地上に立地し、西側には古井堤遺跡をはじめとする「古井遺跡群」が所在する。

調査の経過　鹿乗川改修工事に伴う上橋下遺跡の発掘調査は、昨年度に引き続き今回が２年目になり、県建設部河川課より愛知県教育委員会を通じた委託事業として平成 15 年 1 月から 3 月にかけて本センターが行った。調査面積は、600 ㎡である。

調査の概要　調査区は昨年度に行った 01 A区の南西側に設定された。調査区の北東側約 1/4 程は、01 A区でも検出されている江戸期以降の自然河道が走っている。

第１面　表土を除去した暗茶褐色面で遺構検出を行った。遺構としては、南東に位置する川島町から北西に位置する古井町に通じる現道に沿って北西ー南東方向に走る６～７条の溝が検出された。また、これらの溝に直交する不定形な溝も検出されている。出土遺物が小片のため時期の決定は難しいが、中世後半から江戸期になると思われる。

第２面　鉄分を多く含む畦畔の高まりが検出される面を第２面目の遺構検出面とした。遺構としては畦畔遺構・水田・溝があり、調査区中央部を北北西ー南南東方向に走る SD01・09 の西側に展開している。溝肩に沿って堤状に走る幅 1.2 ～２m・高さ 30 ～ 40 ㎝の畦畔には、２カ所の途切れ部分が確認されており、導水のための水口であると考えられた。水田は、SD01・09 に平行する一辺８mを測るものや、それとは方向を違え、軸線が北西ー南東方向を向く一辺４m程のものが検出されたが、西に行くほど畦畔・水田の痕跡は不明瞭となり、畦畔の切れ目などの詳細は不明である。

出土遺物は小片のため溝・水田の時期は不明であるが、SD01・09 肩部分より宋銭が９枚まとまって出土しており、古代末から中世前半になると考えられる。

第３面　寄道式期の方形周溝墓２基と不明瞭な大型の落ち込みが２カ所、その他土坑・溝が検出されている。　（宮腰健司）


調査風景


土師器皿出土状態


第 1 面（北東から）


第 1 面（南から）


第 1 面（南西から）


SD01・09（南から）


第 2 面（西から）


第 2 面（南から）


第 1 面（北西から）


畦畔セクション（南西から）

荒山（あらやま）古墳群

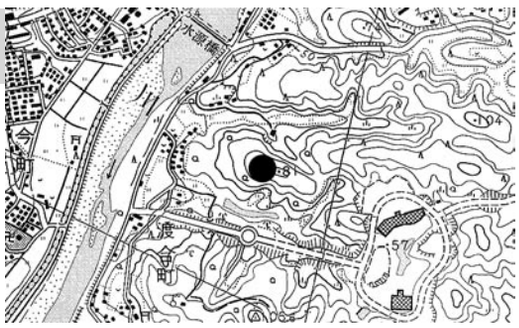
所 在 地　豊田市渡合町

調査理由　第二東海自動車道建設

調査期間　平成 14 年 4 月～ 7 月

調査面積　1,200 ㎡

担 当 者　宮腰健司・小嶋廣也



調査地点（1/2.5 万「豊田南部」）

遺跡の環境　荒山古墳群は、矢作川左岸の標高 80 m前後の舌状に延びる丘陵上に立地し、巴川との合流地点の北西約 1 ㎞に位置する。南に巴川沿いの丘陵には琴平古墳群が、対岸には水源山古墳群や豊田大塚古墳が所在する。

調査の経過　今回の調査は、第二東海自動車道建設に伴い、日本道路公団から愛知県教育委員会を通じて実施したもので、石室の存在が確認されていた 1・2 号墳を中心に、1,200 ㎡の面積を調査した。

調査の概要　**SZ01（1 号墳）**　調査開始時点には、墳丘の墳頂部はすでに無く、石室上部が破壊されて露出している状態で、解体に際して転落したと思われる天井石などの石が、古墳の南西側に散乱していた。また石室内にも大型石を含む多数の石室石材が転落しており、調査はそれらの石と流入していた砂を除去しながら順次進めていった。さらに石室内の堆積土は篩にかけ、微細遺物の検出を行った。

墳丘は流出が激しく、現状では高さ 20 ～ 30 ㎝の盛り土が確認されたのみで、明瞭な版築などは確認できなかったが、墳長は 7 ～ 8 mを測る。石室は地山を掘り込んだ墓壙の中に作られており、石室と墓壙壁との間には、版築状に小礫混じり土が詰められている。検出時の石室の規模は、全長 4.8 m・玄室長 3.6 m・玄室上端幅 0.9 m・玄室下端幅 1.2 m・玄室高 1.6 mを測る。石室は周辺で産出する板状に剥離する花崗岩を用いており、平面形は長方形を、断面形は上部が持ち送りされて、ややアーチ状を呈している。石室の奥壁は、側壁に比べやや大きな石材を用いているが、基本的には同様の形状をしている。羨道部分は、花崗岩を使用した閉塞石が詰められており、石室床面とは約 90 ㎝の大きな段差がある。この石室の開口部側にも奥壁同様にほぼ垂直に立ち上がる石積みがあり、墓壙の間には土が詰められていた。これらの形態から、SZ01 の石室は「竪穴系横口式石室」に分類される。棺は極めて狭小な開口部から石室内に搬入したか、または安置後に開口部部分を構築したと思われ、追葬時には石積みを取り外して棺を搬入している可能性が考えられた。

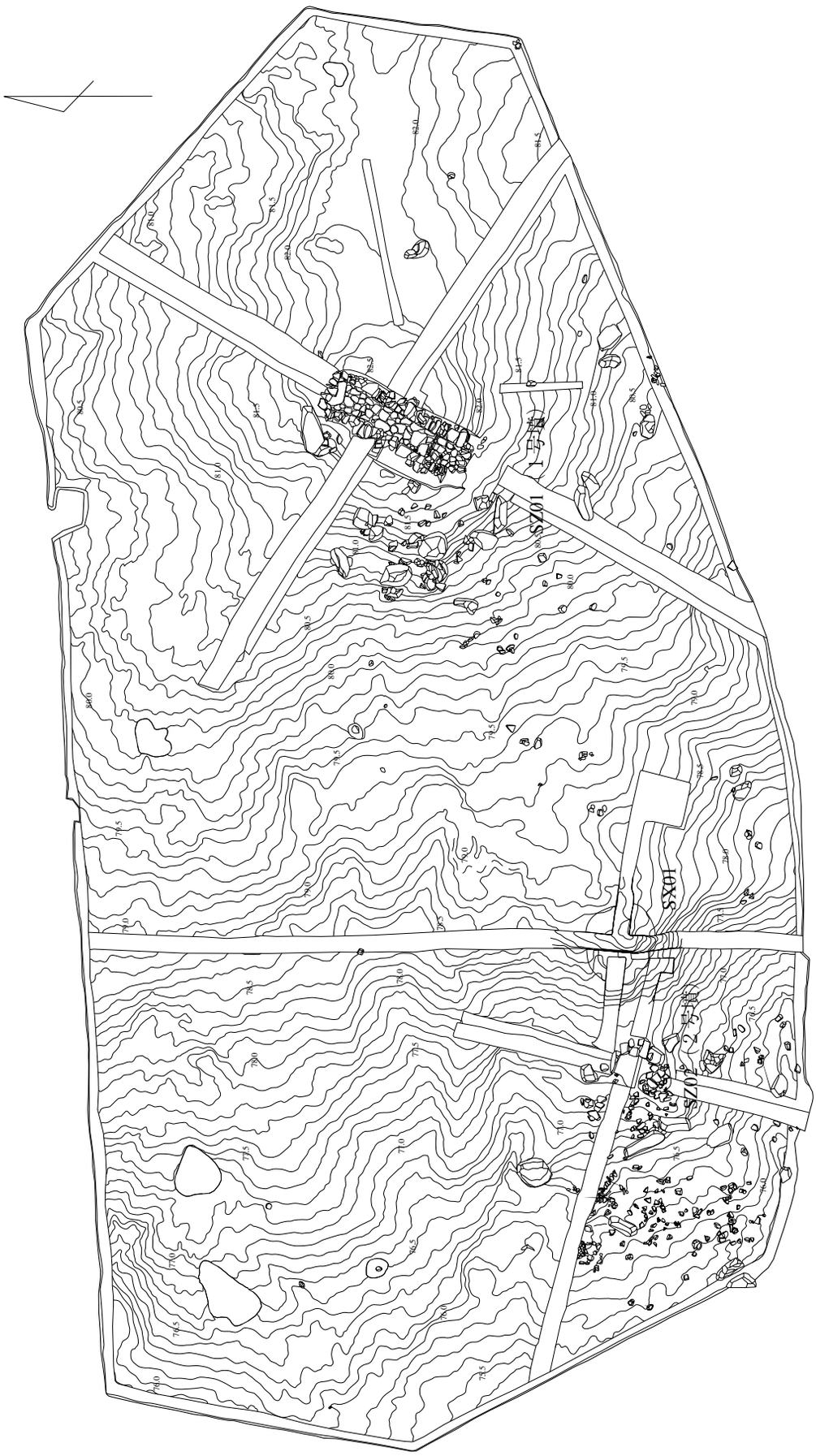
遺物は、石室内のほぼ全域でガラス小玉、羨道部から石室に移る部分で杯蓋、石室南西隅のほぼ床面上でハソウ・杯蓋・大刀、石室内から鉄鏃・耳環が出土している。これらの遺物より、SZ01 の築造時期は 6 世紀中頃を中心とした時期になると考えられる。

SZ02（2 号墳）　調査開始時点にすでに石室全体が露出しており、天井部や石室の左側壁・床面部分にまで破壊が及んでいた。墳丘はほとんど残存しておらず、墳長は不明である。検出時の石室の規模は、全長 1.8 m・玄室推定幅 0.7 mを測る。石材は小型の花崗岩を用いているが、奥壁のみ縦 1.2 m・横 0.7 mを測る大型のものとなっている。

石室内より遺物が出土していないため、築造時期は不明であるが、周辺から出土した須恵器より、7 世紀後半であると推定される。

また、SZ02 の東側には径 2 ～ 3 m、高さ 0.8 mの盛り土 SX01 が検出されている。

（宮腰健司）



荒山古墳群遺構配置図（1：200）



SZ01 石室（南から）



SZ01 石室（北から）


SZ01 石室調査前（西から）


SZ01 石室表土除去状況（南から）


SZ01 石室開口部（北西から）


SZ01 石室開口部半裁（西から）


SZ01 石室基底部・墓壙（南から）


SX01（北東から）


SZ02 石室（南から）


SZ02 石室（西から）